ソードアート・オンライン～最速の刀使い～

カメ@ノゾミ推し

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は転生したオリ主が原作キャラと一緒に奮闘する話です。

初めて投稿します温かい目で見てもらえるとありがたいです（笑）

目　次

SAO
気づいたらゲームの中にいたんだけど?! ―――― 1
ステータスポイントみんななならどう振る?～ボス攻略を添えて～ ―――― 4
初めてのボス攻略（道中）～オラワクワクすっぞ～ ―――― 10
天国と地獄は紙一重～始まりのボス攻略～ ―――― 14
ロリなビーストテイマーと最速の刀使い～ロリに懐かれた刀使い～ ―――― 19
最速の刀使い～柄にも似合わないことは絶対にするな～ ―――― 22
最速の理由～やっぱ二つ名って正直いらんくない? ―――― 25
みんな自分の相棒（剣）を作ってもらうには絶対に腕のいいやつのところに行ったほうがいい ―――― 32
スキルのご利用は計画的に～青眼の悪魔を添えて～（青眼ってさシャナみたいだよね） ―――― 34
俺の速度は止まんねぇからよ……おまえらも…止まるんじゃねぇぞ…… ―――― 37
デュエルの前の静けさって異様に緊張するよね ―――― 43
激突！《神速》VS《神聖剣》～可愛い人や美少女の頼み事って大体断れないよな～ ―――― 47
なんか知らんけど親になってた件について ―――― 50
暇を持て余した《神速》の遊び ―――― 54
親の気持ち～実際に親になったことないからわからんけど～ 59
色々考えても分からないもんは分からない～但し考えることはみ

んな辞めないで～ ―――― 63
久しぶりにやるものは大体忘れる ―――― 66
舞い戻りし神速前編 ―――― 69
舞い戻りし神速中編 ―――― 73
舞い戻りし神速後編 ―――― 76
激突！《神速》ＶＳ《神聖剣》完結編～勝利の女神はどちらに傾く～前編 ―――― 84
激突！《神速》ＶＳ《神聖剣》完結編～勝利の女神はどちらに傾く～後編 ―――― 88
エピローグってやつさ ―――― 93
ＡＬＯ１
プロローグという名の駄文 ―――― 100
２度目のリンク・スタート～初めてのことには誰もが弱気になるものさ～ ―――― 103
あぁ～娘が可愛いんじゃ～（お巡りさんこいつです） ―――― 107
男ってたまにカッコつけたくなるよね ―――― 110
弄るのは大好きだけど弄られるのはちょっと無理ってやつ結構いるよね ―――― 114
子供に説教されるってかなり心に来るんだね…… ―――― 117
人に言われて初めて気づくことって多いよね ―――― 120
空を飛ぶってイメージじゃなんとかならない部分ってあるよね 123
強いが故に周りが見えづらくなるって本当にあるんだね ―――― 127
たまに褒めてるのか馬鹿にされてるのかわからないやつってあるよね ―――― 130

ＳＡＯ
気づいたらゲームの中にいたんだけど?!

気がつくと見知らぬ場所に少年が立っていた。
「アイエェ‼?ココどこ⊠」
とりあえず落ち着けもちつけ、なんで俺はこんな場所にいる?というかなんでこんなにも周りが騒がしいんだ?
「それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え」
アイテムストレージ?唯一の現実?何を言ってるんだ?とりあえず周りの人の真似をしてみるか
「なんだ?これ?というかこのメニューってもしかして…」
ここってもしかしてＳＡＯ⊠ということは俺は転生というやつをしたのか?
「っっうことはここに手鏡があるってことだよな?お!あったあったこれをオブジェクト化してみればいいんだな?」
?何もおこらねぇぞどうなってんだ?どうして周りは変わったもとい戻ってんのに俺は変わらねぇんだ?
「…以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の健闘を祈る」
おっと考えすぎて何も聞いてなかったけどとりあえず１００層クリアすればいいんだろ?
「いいぜやってやるよ俺だってゲーマーの端くれだ絶対にクリアしてやるよ」
少年は不敵に笑いフィールドへと駆け出した
その少年の名は神居　刀矢　プレイヤーネームカイト

なんて言って飛び出してきたけど正直どこに行けばいいか分から

んな…
「ま、なるように慣れだろ知らんけど」
「一応次の村みたいなところまでついたけどこれからどうすっかな～
そういやスキルの確認とかしてなかったな今のうちにしておくか」
「え～とスキル欄はっとあったあった曲刀と後は無しか一個空いてるし索敵でも入れてみるか」
明日からはレベル上げをどれくらいだっけ？安全マージンは階層＋１０レベぐらいだっけ？とりあえず１０後半ぐらいまで頑張ってやってみるか……

はいやってまいりました。私は今どこにいるかというと迷宮区に一番近い街トールバーナに来ました
え？レベリングの光景？ただひたすらにモンスター分かるだけだからカットだよそんなん。　べ、別にめんどくさいから書かなかったとかじゃないんだからな（誰得）
さて話を戻しますとなんでここに来たかって話。
まぁ簡単に言うとレベルは目標の１５になったからこれから迷宮区を攻略していこうかなって思ってここに来たんだよね（関風）。
冗談はさておき街の散策でもしようかな…アイテムの補充もしなきゃなんねぇし後は単純に場所を覚えておきたい。
そんな風景見せると思ったかつまらんから見せんよ。
さていい感じに日も暮れてきたし泊まれるとこを探すか…こういうのを探すのもＭＭＯＲＰＧの醍醐味でもあるよな～。まぁその風景もバッサリカットするけどね。
さて朝ですよ今日もカイトさんは元気にやっていきますよ～
ん？あれ　え？攻略会議？もうボス部屋見つけた？そんなバカな俺の意気込みを返せ！
というわけで攻略会議に参加してますよ～　ホントに俺の意気込みを返してほしいわ！まぁそんなんでもなかったから別にいいけど。
あぁ～なんかサボテンが喚いてるな～ん？へ？パーティを組めと？周りの人と？まぁ残ってる人とでいいか

ん？あそこの２人組が余ってそうだな入らせてもらうか
「なぁあんたらってパーティ組んでるか？よかったら入れてもらいたいんだけど」
「あぁ問題ないよあんたもそれでいいか？」
「…えぇ問題ないわ」
「サンキュ俺はカイトよろしくな」
「俺はキリトこっちこそよろしく」
「…私はアスナボス攻略の間だけだけどよろしく」
うーん最初の頃のアスナって掴みどころがわかんないな…まぁそのうち慣れるだろ
あの中央で話してるやつの名前なんだっけ？まぁなんでもいいかそいつの「解散」って言う前にアスナが立ち去ろうとしたその去り際にキリトに向かってなんか言ってたけどなんて言ったかは俺には聞こえなかったまぁ知る気もないけど

ステータスポイントみんなならどう振る？～ボス攻略を添えて～

　おいっす～☆どうも今日も元気なカイトさんだよ～今何をしてるかって？
「……で、説明って、どこでするの」
「あ、ああ…俺はどこでもいいけど。その辺の酒場とかにするか？」
「……嫌。誰かに見られたくない」
「なら、どっかのＮＰＣハウスの部屋とか…でも、誰か入ってくるかもしれないしなあ。どっちかの宿屋ならカギかかるけど、それもナシだよな」
「当たり前だわ」
　と言うふうにどこでスイッチの仕方、ＰＯＴローテの仕方の説明をするか話し合っているまぁ上に書いている通り俺はあんまり参加してないけど
　というか時々アスナがこっちをチラチラと見てくるんだけど俺なんかしましたかねぇ？
「…だいたい、この世界の宿屋の個室なんて、部屋とも呼ばないようなのばっかりじゃない。六畳もない一間にベッドとテーブルがあるだけで、それで一晩五十コルも取るなんて。食事とかはどうでもいいけど、睡眠だけは本物なんだから、もう少しいい部屋で寝たいわ」
「え…そ、そう？」
　俺とキリトで被ってしまった　いやだって仕方ないじゃん流石に２週間くらいここにいるんだったらそれくらいわかると思うじゃん
　というふうに思っていると
「探せばもっといい条件のとこもあるだろ？そりゃ多少値が張るかもだけど……」
「多分だけど【ＩＮＮ】の看板が出ているとかしかチェックしてないんじゃないか？」
「ああ…なるほど。この世界の低層フロアじゃ、最安値でとりあえず

寝泊まりできる店って意味なんだよ。コルを払って借りられる部屋は、宿屋以外にもけっこうあるんだ」
　そう説明するとアスナの唇がぽかんと丸くなった。可愛い（確信）目見えないけど
「な……そ、それを早く言いなさいよ……」
「なら俺の部屋くるか？風呂もついてるしそれに部屋も余ってるから話せる場所も確保できるぞ」
「それならカイトの部屋に……」ガシッ
　ん？なんか腕が掴まれた感覚がそれとどことなく似たような経験があったような……
「……なんですって？」
「え、えっと部屋が余ってる……？」
「そのまえ」
「ふ、風呂つき…？」
「あなたの部屋、一晩なんコル？」
「え、えっと確か八十五コル」
「その宿、あと何部屋空いてるの？場所はどこ？私も借りるから案内して」
「あー、俺さっき部屋が余ってるって話たよな？」
「…ええ話してたわね」
「それって丸ごと借りてるって意味なんだ。一応あるにはあるけど同棲みたくなっちゃうから変な噂とかたっちゃうけど大丈夫か？」
「そのくらいなんともないわお風呂に入れればなんでもいい」
「お、おうなら俺の泊まってるとこに案内するよ」
　なんでそんなに必死になってるかわからんけどなんかの間違いさえなければ大丈夫だろ

「……どうぞ」

「……ありがと」
　あぁ～ようやく帰ってこれたぜぇ～これで落ち着いて話し合いができるな
「な、何これ、広っ……こ、これで私の部屋とたった３５コル差?!や、安すぎるでしょ……」
「こういう部屋を速攻見つけるのが、重要なシステム外スキルってやつだよな?キリト。まぁ俺は他のＭＭＯＲＰＧをやり込んでたからできたけど……」
「あ、ああ俺の場合は違うけど……」
「?あ、見れば解ると思うけど、風呂場そこだから……ご自由にどうぞ」
「あ……う、うん」

「さて、アスナも風呂に入ったしキリトよお前さん元ベータテスターだろ?さっきの会話からかなり後ろめたくなってたからちょっと気になってたけど」
「☒……そうだよ元ベータテスターだったらなんだ?キバオウとおんなじようにコルを全部出せって話か?」
「あぁーすまんそんなつもりで言ったわけじゃないんだほんとにただ気になっただけだからそんな怒らんでくれ」
「……そうか」
「ベータテスターなんていてもいいと俺は思うけどな…いなかったら正直ここまでスムーズ……とまではいかねぇけど来れたんだからよっとこんな感じでいいか」
「?何をしてたんだ?」
「ポイントを振り分けてた」
「マナー違反だけどどんな感じに振ったんだ?」
「いいって別に喋らなきゃ問題なんてねぇんだからよ　　ＡＧＩ極振

りだ」
「なんでＡＧＩにほとんど振ったんだ⊠そんなの攻撃を受けたらすぐ死ぬぞ⊠」
「当たらなきゃいいんだよ当たらなきゃな」
「そんな軽々しく言ってもな……」コンコンコン
「ん？こんな時間に誰だ？」ガチャ
「はーいなんでしょうか？」
「おっと夜遅くにすまないナここにキー坊はいるカ？」
「キー坊？あぁキリトのことか？ならいるよ中に入ってくつろいでくれ」
「おーすまないナなら失礼するヨ」
「にしてもこんなに広い部屋があるなんてナ初めて知ったヨ」
「俺も最近だよ知ったのは、今までいいところがないか探して漸く見つけたからな。でもキリトのところにあるミルクはねぇよあれ欲しかったんだけどな……」
「まぁいいじゃないかこんだけ広い部屋があればさ」
「あぁそういやキリトに用事があるんだったな俺は抜けた方がいいか？」
「別に構わないヨ、そんジャ、本題に入るヨ」
「まぁ、依頼人がいるって時点で察しはついてると思うけどナー。例の、キー坊の剣を買いたいって話……今日中なら、三万九千八百コル出すそーダ」
　さ、三万九千八百コル⊠そんな金があるならおんなじ武器が作れると思うなーカイトさんは
「……あんたを侮辱するつもりはないけど……それ、何かの詐欺じゃないのか？どう考えても、四万コルは間尺に合わないよ。だって、素体の《アニールブレード》の相場が、確かいま一万五千くらいだろ？それに二万足せば、ほぼ完全に強化できるだけの素材アイテムも買えるはずだ。ちょっと時間はかかるかもしれないけど、三万五千コルで俺のと同じ剣が作れる計算だぞ」
「オレっちも、依頼人三回そう言ったんだけどナ！」

なかなか重い話だなこれは…にしてもなんで依頼人はキリトの剣を買う必要がある？そこが問題だ…けど何も知らない俺が考えても答えは出てこないか
「……アルゴ、あんたのクライアントの名前に千五百コル出す。それ以上積み返すか、先方に確認してくれ」
「んじゃ名前を聞かないように俺は別の部屋に行くよ終わったら呼んでくれ」
「あぁ……すまないな」
「別にいいってことよ」
んじゃまアイテムの整理をしますかね

「カイト終わったぞ」
「おう今行く」
「そんじゃ、オレっちはこれで失礼するヨ。その攻略本、役に立ててくれよナ」
「ああ……」
「っと、帰る前に、悪いけど隣の部屋借りるヨ。夜装備に着替えたいカラ」
「ん？あぁ問題ないぜ」
ん？今なんつった？隣の部屋？隣の部屋なんて風呂場しかないけど…って風呂場にはアスナがいるんじゃ…まずい!!?
「ちょ、待ってく……」
「わあア☒」
「……きゃあああああ!!?」
あっ（察し）よしこうなったら
「……煩悩滅却すれば火もまた涼し!!?!!?!!?!!?!!?」ガンガンガンガンガン!!?!!?!!?!!?!!?
「カイト☒いきなりどうした☒」

その後の記憶がない

初めてのボス攻略（道中）～オラワクワクすっぞ～

オッスオラカイトこれからボス攻略なんだけんどワクワクしてきたぞ

っていう茶番は置いといて、実は昨日の夜から何をしてたのか思い出せないんだ。キリトやアスナに聞いてもわからないっていうから困っているところだ。まぁ考えても意味ないから目の前のことだけに集中するかな

「おい」

後ろからサボテ…ゲフンゲフントゲトゲ頭のプレイヤーが話しかけてきた

唖然とするキリトを睨みつけながら

「ええか、今日はずっと後ろに引っ込んどれよ。ジブンらは、わいのパーティーのサポなんやからな」

こいつ偉そうだな後でサボテンからハゲにさせたろうか

「大人しく、わいらが狩りもらした雑魚コボルドの相手だけしとれや」

マジでこいつハゲにさせたろうか悩んでいると右隣から

「……何、あれ」

さらには左隣から

「さ、さあ……。ソロプレイヤーは調子乗んなってことかな……」

そんなんだったらほとんどのプレイヤーが調子乗っちゃいけないってことだろギルドなんてまだ先だろうし、なんて思ってると誰だっけあの青髪の人ディアダムだっけ？が話し始めた

「みんな、いきなりだけど……ありがとう！たった今、全パーティー四十五人が、一人も欠けずに集まった‼？」

う、うるせぇ何でこんなに元気なんだよこいつらすげぇな

「今だからいうけど、オレ、実は一人でも欠けたら今日は作戦を中止しようって思ってた！でも……そんな心配、みんなへの侮辱だったな！オレ、すげー嬉しいよ……こんな、最高のレイドが組めて……。まあ、人数は上限にちょっと足りないけどさ！」

やかましいわなんだったら今から抜けてやろうかな？

「みんな……もう、オレからいうことはたった一つだ！」
お、何をいうのかなどうせ勝とうぜ‼？みたいなこと言うだけだろ
「……勝とうぜ‼？」
なんで普通のこと言っちゃうかなもっとひねろうぜ

「……ねえ、あなたたちは、ここに来る前も他のエ……ＭＭＯゲーム？っていうの、やってたんでしょう？」
「ん……あ、ああ、まあね」
「かなりやりこんでたな」
「他のゲームも、移動の時ってこんな感じなの？なんて言うか……遠足みたいな……」
「……はは、遠足は良かったな」
「残念ながら、他のタイトルじゃとてもこうはいかなかったよ。だって、フルダイブ型じゃないゲームは、移動するのにキーボードなりマウスならコントローラーを操作しなきゃならないからさ。チャット窓に発言を打ち込んでる余裕はなかなかない…だよなカイト」
「あぁ、けどボイスチャット搭載のゲームはその限りじゃないさ」
「ふうん」
「……本物は、どんな感じなのかしら」
「へ？ほ、本物？」
「だから……こういうファンタジー世界が本当にあったとして……そこを冒険する剣士とか魔法使いとかの一団が、恐ろしい怪物の親玉を倒しに行くとして。道中彼らは、どんな話をするのか……それとも押し黙って歩くのか。そういう話」
「…それを日常として生きてるんだから喋りたいときに喋ってあとは黙るんじゃね？これからボス攻略をどんどんしていくんだ俺たちもそういう風になると思うぜ」
「……ふふ、ふ」

そんなに面白いこと言ったかな俺、それともバカにされてる？後者だった場合すげぇ傷つくんだけど
「笑って御免なさい。でも……変なこと言うんだもの。この世界は究極の非日常なのに、その中で日常だなんて」
「そうかもしんねぇな……けどよ今日でもう一ヶ月なんだ。仮にここを突破したとしても後上に九十九層残ってんだ。俺はさ……二、三年かかると思ってるそれを続ければ非日常も日常になるさ」
「……強いのね。わたしには、とても無理だわ。この世界で何年も生き続けるのは……今日の戦闘で死ぬことよりずっと怖く思えるから」
　すると左隣から
「上の層までたどり着ければ、もっとすごい風呂があるのになー」
「……ほ、ほんとに？」
「……思い出したわね。腐った牛乳ひと樽、ほんとに飲ませるからね」
「なら、少なくとも今日は生きて帰らないとな」
　俺の知らないところで何があったんだ？こいつら仲がいいのか悪いのかいまいち掴めないな　後俺の会話少なすぎじゃね？（今更）

　さーてカイトさんは今どこにいるかと言うと迷宮区最上部を踏破しボス部屋前まで来ていますよ～
「……ちょっといいか」
「ん？なんだ？」
「今日の戦闘で俺たちが相手する《ルインコボルド・センチネル》は、ボス取り巻きの雑魚扱いだけど十分に強敵だ。昨日もざっと説明したけど、頭と胴体の大部分を金属鎧でがっちり守ってるから、あんたの《リニアー》もただうったんじゃ徹らない」

「わかってる。貫けるのは喉元一点だけ、でしょ」
「そうだ。俺らが奴らの長柄斧をソードスキルで跳ね上げさせるから、すかさずスイッチで飛び込んでくれ」
なんか知らん間に役割が決まってた件についてまぁそこまで苦ではないから別にいいか
「……いくぞ！」
ディアベルは短く一言だけ叫び、思い切り押し開けた。

天国と地獄は紙一重〜始まりのボス攻略〜

ウィーーーース‼?どうもカイトでーーーす‼?
冗談はさておき今俺は何をしているかと言うと……
「スイッチ‼?」
「はあああ‼?」
ボス攻略に来ております。まぁ俺の出る幕がなくなってるんだけどね（´∀｀）
というかアスナさん?あなた俺のことパートナーにするって言ってたくせにキリトと組むんですね　べ、別に悲しくなんてないんだからね！（誰得（二回目）
まぁ別にいいんだけどな攻略に参加してない分ボスのことをちゃんとした感じでみれるから。攻略本に載ってたようにβテストと違う部分を集中して見分けれるような環境が欲しかったところだし、そういやタルワールってどんな形だったかな?俺が見る限り違う形状な気がするぞ?刀に見えなくもないなあれは
お?ボスのＨＰが半分くらいまで削れたな　とりあえずキリトに報告かな
「キリト少しいいか?」
「ん?どうした?姿が見えなかったけどなんかしてたのか?」
「ボスの様子を観察してた」
「なんでそんなことを?」
「攻略本に書かれてたろ?βテストと違うかもしんねぇってだからさ」
「それで何かわかったのか?」
「多分あいつのサブ武器タルワールじゃない。もしかしたら刀かもしんねぇ。形状が明らかに違った」
「⊠それはマズイ‼?ボスのＨＰはどのくらいだ⊠」
「今もう少しでラスト一本だ。刀だと何がマズイんだ?」
「刀を使ったモブは１０層からでしかいないんだ‼?」
は?刀は１０層から?……つまり最低でも１０層からのソードスキ

ルが出るかもしんねぇってことか⁉？

「よっしゃー⁉？ラスト一本だ⁉？」
「みんな下がれ⁉？俺が出る⁉？」
「ディアベルさん⁉？バシッと決めてやれ⁉？」
「ディアベル⁉？全力で後ろにとべ⁉？⁉？⁉？」
☒マズイ⁉？間に合え⁉？
ガキン⁉？⁉？
「重ぇなこの刀⁉？⁉？うらぁ⁉⁉⁉⁉」
「ガルルルル⁉⁉」
「カイトさん…」
「さっさと下がれ⁉死にてぇのか☒」
「☒……すまない一旦任せた」
「おう、任された。さぁやろうぜ！デカブツ野郎⁉⁉」
今までやらなかった分を今からこいつにぶつけてやる⁉⁉
「おらぁ⁉「ブン！」っちあぶねぇじゃねぇか！」
「なんだ…あいつ…どうしてたった一人であんな受け流せるんだ？」
ガッ
「グハッ！」
「カイト⁉？大丈夫か⁉？」
「くそっ⁉？野郎やりやがるじゃねぇか…けどマズイなこのままだとジリ貧で俺が死ぬな……」
「あんまり無茶はするな！いつか必ず決定打をもらうぞ！」
「そうだ！いつまでもダメージディーラーがタンクをするんじゃ

ねぇ。タンクは俺たちに任せろ」
「わたしにもやらせて一人だとまたさっきみたいになるから、それに私たちコンビを組んでるでしょ？」
「こんな時だけコンビ扱いかよ「何か悪い？」おお怖いこと、まぁ確かに俺一人だと死ぬな…けどアスナお前がいればなんとかなる頼りにしてるぜ？」ニコッ
「っ☒ええあなたもね？」
「？うし、いくぞ!!」
　相手の残りＨＰ後四割攻めきれる!!
　曲刀三連撃スキル《リルガル・リーヴァ》
「くそっ！たらねぇか！後少しなのによう！」
　細剣単発スキル《リニアー》
「はあああ!!」ザシュッ
「グラァ☒」ズドン
　☒《転倒》か？なら……
「キリト!!」
「☒みんな囲んでいいフルアタックだ!!」
　このＨＰの減りじゃフルアタックで間に合わない…なら…
「アスナ最後の《リニアー》一緒に頼む！」
「了解!!」
　俺はアスナと同時に駆け出しインファルグザ・コボルドロードに向かって全速力で走る
　まず先にアスナのリニアーがインファルグザ・コボルドロードの脇腹に打ち込まれる
　それに少し遅れて俺の剣が右肩から腹まで切り裂いた。獣人がニヤッと笑った気がした。それに対して俺は不敵に笑みを浮かべ曲刀二連撃スキル《リーヴァ》の二連撃目が左肩へと抜けていった

「お疲れ様」

そっか終わったのか…めっちゃ疲れたな予想以上に身に染みたぜ
「……見事な剣技だったぞ。コングラッチュレーション、この勝利はあんたのものだ」
「いや……」
「なんでや!!なんでディアベルはんを殺そうとしたんや!!」
「殺そうとした……？」
「せやろが!!あんたがボスの情報を提供していればこんなことにはならなかったはずや!!」
「俺知ってる…こいつ元ベータテスターだ…だからこいつうまいクエとか色々知ってるんだ」
「おい…お前…」
「あなたたち…いいかげんに…」
「は、はははｗｗｗ…俺がベータテスター？何いってんだ？あんなクソどもと一緒にするなよ。それと勘違いするなよ情報は少なからずあったはずだぜ？攻略本に書いてあったろ？βテストの時と違う可能性がありますとそう書かれてたはずだぜ？それを見ずにやれ情報を提供しろなどふざけたこと言ってんじゃねぇよくだらねぇ。それに結果論…ディアベルだっけ？そいつが生きてんだからいいだろ別に…それに二層へのアクティベートはしといてやる死ぬ覚悟があるやつだけ追いかけてきな」
あぁ～すげぇくさいセリフ言っちまったなぁ～まぁヘイトが俺だけに向けばそれでいいか

「なんでついてきた…？」
「…伝言があるからよ」
「伝言……？」
「…キバオウさんとエギルさんとキリト君からの伝言……『今回は助けてもらたけど次からはいらんわいはわいのやり方でクリアを目指す』ってキバオウさんから『またボス攻略しようぜ』ってエギルさんから最後にキリト君から『カイトに背負わせてしまったみたいでごめん』って」
「そっか、キリトには俺の方こそすまんこれからもよろしくって言っといてくれ」
「……ほんとはね、カイト君あなたにお礼を会うために追いかけてきたの」
「…なんのだ？」
「……いろんなことのお礼。わたし……この世界で、初めて目指したいもの、追いかけたいものを見つけたの」
「……へぇ……よかったじゃねぇか」
「……うん。……わたし、頑張る。頑張って生き残って、強くなる。目指す場所に行けるように」
「あぁ……。おめぇは強くなれる。剣技だけじゃなく、もっとずっと大きくて貴重な強さを身につけられる。だから……もしいつか、誰か信頼できる人にギルドに誘われたら、断るなよ。ソロプレイには絶対的な限界があるから……」
「……じゃあ、またね、カイト君」

よしくよくよしてても意味がねぇ早速フィールドに出てレベリングするぜ!!

ロリなビーストテイマーと最速の刀使い～ロリに懐かれた刀使い～

挨拶のネタが思いつかなくてヤバいですね☆どうもカイトさんですよー

今わたしはどこにいるかと申しますと

「……わるい。君の友達、助からなかった」

「お願いだよ……あたしを独りにしないでよ……ピナ……」

三十五層に来ております。本来なら別の用事があったんだけど…目の前でやられてる人がいれば助けたくなるわ　だってデスゲームだもん

とりあえず助からなかったから謝らねばばばば

「……わるい」

「……いいえ……あたしが……バカだったんです……。ありがとうございます……助けてくれて……」

偉い子やな普通なら逆ギレされてたと思うんだけど…けどまずは確認からだな

「……その羽根だけどな。アイテム名、設定されてるか？」

多分俺の予想が正しければ《心》があるはず…普通なら羽根だけ残るのはおかしい…死んだら四散するはず

そこに表示されていたのは

《ピナの心》

☒ビンゴ‼？ん？けどなんで泣き出しそうなんだ☒

「ま、待った待った。心アイテムが残っていれば、まだ蘇生の可能性がある」

「え☒」

「最近わかったことだから、まだあんまり知られてないんだ。四十七層の南に、《思い出の丘》っていうフィールドダンジョンがある。名前のわりに難易度が高いんだけどな……。そこのてっぺんに咲く花が、使い魔蘇生用のアイテムらし―」

「ほ、ほんとですか☒」
うお☒すげぇ元気だなん？また肩が落ちた
「……四十七層……」
「……あーっと、別に俺が行ってきてもいいんだけど使い魔を亡くしたビーストテイマー本人がいかないと、肝心の花が咲かないらしいんだよな……」
「いえ……。情報だけでも、とってもありがたいです。頑張ってレベル上げすれば、いつかは……」
「それがそうもいかないんだ。使い魔を蘇生できるのは、死んでから三日だけらしい。それを過ぎると、アイテム名が《心》が《形見》に変化して……」
「そんな……！」
最近の子は感情が豊かでいいな～っとそんなこと考えてる暇はないよな…正直あそこくらいなら俺一人でなんとかなるけど…この子を連れてだとちょっちきついかな…確かアイテム欄にアレがあったはず…
お！あったあったこれでなんとかなるだろ
「あの……」
そりゃ戸惑うよないきなり装備を渡されると
「この装備で六、七レベル程度底上げできるさ。俺も一緒に行けば、なんとかなるだろ」
「えっ……」
ん？なんでこんなに見つめられるんだ？そ、そんなに見つめないでくれカイトさんは恥ずかしがり屋なんだぞ！（誰得（三回目）
「なんで……そこまでしてくれるんですか……？」
冗談はさておき…そりゃ警戒するよな……
「人を助けるのに理由なんているか？……まぁ周りの人たちからはお人好しってめちゃくちゃ言われるけどな」
なんか笑われたんだけど☒俺そんなにおかしいこと言ったかな？
「よろしくお願いします。助けてもらったのに、その上こんなものまで……」

「あの……こんなんじゃ、全然足らないと思うんですけど……」
「いや、お金はいいよ。どうせ余ってるやつだし、それと俺はお金が欲しくて助けたわけじゃないからさ」
まぁ他にも理由はあるにはあるけど別にこの子に話す意味はないからな
「すみません何から何まで……あの、あたし、シリカっていいます」
「俺は、カイト。しばらくの間、よろしくな」ニコッ
「⊠⁉?……はい……／／／」
ん？なんか顔が赤くなってんだけど大丈夫か？ゲーム内だから風邪をひいたってわけじゃないだろうし、よくわかんねぇや

最速の刀使い～柄にも似合わないことは絶対にするな～

おいっす～☆今日も元気に頑張るぞい☆どうも～カイトで～す。
今日は三十五層の主街区に来ておりますまる。（作文風）
今はシリカに連れられて主街区の中心部まで来ている。
かなり人気なんだろうなすれ違うプレイヤーの殆どが声をかけてる。っと考えすぎて周りがどうなってたか気にしてなかったな
「あ、あの……お話はありがたいんですけど……」
すげぇな、受け答えが嫌味にならないようにしてる…できた子やな
「……しばらくこの人とパーティーを組むことになったので……」
ん？なんでヘイトが俺に向くんだ？それはお門違いだろ……
「おい、あんた―」
お？なんどすえぇ～
「見ない顔だけど、抜けがけはやめてもらいたいな。俺らはずっと前からこの子に声をかけてるんだぜ？」
「んなこと言われても俺から迫ったわけじゃないんだぜ？」
たく、めんどいやつらしかいねぇな
「あの、あたしから頼んだんです。すみませんっ」
アイエェ引っ張らないで服が、服が伸びちゃうぅ‼？（キモイ）
おい作者ゴラ、あとでぶっ飛ばすぞ　　あっすいません（主）

「……す、すみません、迷惑かけちゃって」
「いやいや」
「すごいな。人気者なんだな、シリカって」
「そんなことないです。マスコット代わりに誘われてるだけなんです、きっと。それなのに……あたしいい気になっちゃって……一人で

森を歩いて……あんなことに……」
　う～ん、やっぱり心配なんかな？そりゃそうか友達だもんな…よし！こうなったらお兄さん元気付けれるようにコミュ障なりに頑張るぞい☆
「だいじょうぶ」
「絶対生き返らせられるさ。心配すんな」
「あ、カイトさんホームはどこに……」
「ん？ああ、いつもは五十層なんだけど……。面倒だから俺もここに泊まるよ」
「そうですか！」
　こんなに嬉しそうにしちゃって…妹がいたらこんな気持ちになるんかねぇ、妹持ちの人はいいねぇそりゃシスコンになるわ
「ここのチーズケーキがけっこういけるんですよ」
　ん？なんだあいつ…こっちをみやがって…やだあいつきもちわりぃ
「あら、シリカじゃない」
「……どうも」
「へぇーえ、森から脱出できたんだ。よかったわね」
　☒こいつあの……
「でも、今更帰ってきても遅いわよついさっきアイテムの分配は終わっちゃったわ」
「要らないって言ったはずです！―急ぎますから」
　ほんとに性格わりぃな…聞いた通りだこいつで間違いないな…
「あら？あのトカゲ、どうしちゃったの？」
　☒こいつ傷に塩を塗るタイプか☒
「あらら、もしかしてぇ……？」
「死にました……。でも！」
　ほんとに強いなこの子は……
「ピナは、絶対に生き返らせます！」
　こんな子をあいつは狙ってる…絶対に守ってやるからな…
「へえ、てことは、《思い出の丘》に行く気なんだ。でも、あんたのレ

ベルで攻略できるの？」
「できるさ」
　こいつにはガツンと言ったほうがいいかもな…まぁ俺に言える度胸があればな
「そんなレベルの高いダンジョンじゃない」
　こっちを見るな外道が…
「あんたもその子にたらし込まれた口？またとかそんなに強そうじゃないけど」
「人は見かけによらずってな…あまり舐めてるとデュエルでもして俺の実力を無理にでもわからせてやろうか？」
　殺気を込めて相手を睨む
　少しばかり震えてるな…それさえわかりゃいい…さてシリカの方も怖がってるみたいだし
「行こう」
「ま、まあ、せいぜい頑張ってね」
（強がりもたいがいにせよ）これはさすがに言わんけど

最速の理由～やっぱ二つ名って正直いらんくない？

おいっす～☆どうもカイトで～す。この挨拶を定着させて行こうかなって思ってるよ☆

さて気持ち悪い挨拶はおいといて、今何をしているかというと

「ぎゃ、ぎゃあああああ⁉？なにこれ――⁉？き、気持ちワル――――⁉？」

……四十七層に来ています……シリカ……強く生きろよ……

「や、やあああ⁉？来ないで――――」

冗談はさておき一応シリカの戦闘のレベルを上げて欲しいから戦わせてるけど結構キツそうだな～

「やだってば――――」

はぁ…ったく少しばかり助言してやるか

「だいじょぶだって。そいつは凄く弱いから。花のすぐ下の、ちょっと白っぽくなってるとこを狙えば簡単に……」

「だ、だって、きもちわるいんですううううう――――」

「そいつで気持ち悪がってたら、この先に進んだら大変だぞー。花がいくつも付いているやつや、食虫植物みたいなのや、ぬるぬるな触手が山ほどに生えたやつまで……」

「キエ――――――⁉？」

おうふ…ここまでとはさすがのカイトさんも思わなかったぞ…あーあソードスキルをめちゃくちゃにやっちゃって…持ち上げられるっていうハプニング起こらねぇかな

「わ⁉？」

わお……ほんとに起きちゃったよ……

「わわわ⁉？」

あーさすがにこれは犯罪になっちゃうかなー俺捕まりたくないから見ないようにしよーっと

「カイトさん助けて！黙ってないで助けて!!」

「そ、それはーそのー無理かなーって」

「こ、この……いい加減に、しろっ！」

あっもう少しで見えちゃう…見ないように見ないように…
スタッ
「……見ました？」
「……見てないさ」

そのあと五回ほど戦闘したのちようやく慣れたのか順調に進んでいった

「あれが《思い出の丘》だよ」
「見たとこ、分かれ道はないみたいですね？」
「あぁ。ただ登るだけだから道に迷う心配はないけど、モンスターの量は相当らしいな。気を引き締めていこうか」
「はい！」
元気がいいな…そりゃそうかあとちょっとでピナを生き返らせれるんだから
だからといってあんまり早く行かないでほしいな、いくら倒せるようになったといえどここは今まで進んできた道よりもモンスターが湧くからあまり俺のそばを離れないでほしいな
っとそろそろ着くかな
「うわあ……！」
女の子にとってここは楽園なのかな？すごい喜んでるのがわかる。っと遅れるわけにはいかないよな
「とうとう着いたな」
「ここに……その、花が……？」
「あぁ。真ん中あたりに岩があって、そのてっぺんにあるはず……」
あ、ちょっ…はぁ…追いかけるか

「え……」
　ありゃ？まだ咲いてないんかね？
「ない……ないよ、カイトさん！」
「いや、ほら、見てごらん」
「あ……」
　ようやっと咲いたか…全く心配かけんなよ運営さんよ
「これで……ピナを生き返らせられるんですね……」
「あぁ。心アイテムに、その花の中に溜まっていく雫を振りかければいい。けどここはモンスターが多いから、町に帰ってからの方がいいだろうな。もうちっと我慢して、急いで戻ろうぜ」
「はい！」
　さて早よ帰るか……！まさか着いてきてるとはな
「――そこで待ち伏せてる奴、出てこいよ」
「え……⁉？」
　ようやっとお出ましか…さてここからは俺の用事を済ませるか
「ろ……ロゼリアさん……⁉？なんでこんなところに……⁉？」
　ごめんなシリカ君を囮に使うようなことをさせちまって……
「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高い索敵スキルね、刀使いサン。あなどってたかしら？」
「その様子だと、首尾よく《プラウマの花》をゲットできたみたいね。おめでと、シリカちゃん」
「じゃ、さっそくその花を渡してちょうだい」
「……⁉？な……何をいってるの……」
　さぁこっからは俺のターンだぜ？
「そうは行かないな、ロザリアさんだっけ？いや――ゴミオレンジギルド《タイタンズハンド》のリーダーさん、といった方がいいのかな？それともほんとにゴミって呼んでもいいかな」
　お？怒ってる？ははは ｗｗこんな挑発でおこんのかよｗｗｗけどそれ以上にてめぇらはほかのプレイヤーたちをバカにしてきたんだぜ？それに飽き足らず殺しもしてきたそんな奴らに慈悲はねぇよ
「え……でも……だって……ロザリアさんは、グリーン……」

「オレンジギルドと言っても、全員が犯罪者カラーじゃない場合も多いんだ。グリーンのメンバーが街で獲物をみつくろい、パーティーに紛れ込んで、待ち伏せポイントに誘導する。そんなのはあいつらにとって普通なんだよ」
「そ……そんな……」
「じゃ……じゃあ、この二週間、一緒のパーティーにいたのは……」
「そうよォ。あのパーティーの戦力を評価すんのと同時に、冒険でたっぷりお金が貯まって、おいしくなるのをまってたの。本当なら今日にもヤッちゃう予定だったんだけどー」
　喋るなＢＢＡ空気が汚くなる
「一番楽しみな獲物だったあんたが抜けちゃうから、どうしようかと思ってたら、なんかレアアイテム取りに行くっていうじゃない。《プラウマの花》って今が旬だから、とってもいい相場なのよね。やっぱり情報収集は大事よねえー」
「でもそこの刀使いサン、そこまでわかってながらなかなかその子に付き合うなんて、馬鹿？それとも本当に体でたらし込まれちゃったの？」
「黙れよ。そろそろ口を紡がねぇと首を飛ばすぞ？それに俺はおめぇを探してたんだよゴミ野郎」
「――どういうことかしら？」
「あんたは十日前にあるギルドを襲ったな。リーダーだけが脱出した」
「……ああ、あの貧乏な連中ね」
「リーダーだった人はな、毎日朝から晩まで、最前線のゲート広場で泣きながら仇討ちをしてくれるやつを探してたよ」
「でもなその人は依頼を引き受けた俺に向かって、おめぇらを殺してくれとは言わなかった。黒鉄宮の牢獄に入れてくれと、そう言ったよ。――あんたに、あの人の気持ちがわかるか？」
「解んないわよ」
「何よ、マジんなっちゃって、馬鹿みたい。ここで人を殺したって、ホントにその人が死ぬ証「ならあんたで実験してもいいんだぜ？」あん

た勝手に言わせていれば…でもさあ、たった二人でどうにかなると思ってんの……？」
　ざっと十人くらいか……へぇ……この程度で逆に俺に敵うと思ってんだ……舐められたもんだ……
「か、カイトさん……人数が多すぎます、脱出しないと……！」
「安心しろ。俺が逃げろっていうまで結晶を用意してそこで見てればいいよ。高みの見物というやつさ」
　俺が負けるわけがねぇよ……キリトのやつをデュエルで負かすまではよ……
「カイトさん……！」
「カイト……？」
「その格好……刀使い……。――《神速》……？」
「や、やばいよ、ロザリアさん。こいつ……トップクラスの、こ、攻略組だ……」
　へぇ……俺を知ってるやつはいるにはいるんだな……嬉しくねぇけど……
「こ、攻略組がこんなところをうろうろしてるわけないじゃない！どうせ、名前を騙ってびびらせようってコスプレ野郎に決まってる。それに――もし本当に《神速》だとしても、この人数でかかればたった一人くらい余裕よ!!」
　何を自分に言い聞かせてるんだかそこまで怯えるならはよ諦めりゃいいのによ
「そ、そうだ！攻略組なら、すげぇ金とかアイテムとかもってんぜ！美味しい獲物じゃねぇかよ!!」
　はぁ……残念な人たちだ
「カイトさん……無理だよ、逃げようよ!!」
　さて……シリカも心配してくれてるし戦闘態勢に入って速攻で終わらすか
「オラァァ!!」
「死ねやァァ!!」
「……うるせぇよ、黙ってやられとけ」ヒュン

「う、嘘だろ……なんで俺の腕がねぇんだ⁉？」
「俺のも……」「俺のもないぞ⁉？」
「わかるかこれが俺が《神速》と呼ばれる理由だ。俺のレベルが今八十それにＡＧＩに極振りの人間なんだ、レベル差とステータスの違いだ数値が少しでも違うと大体のものが全部変わってくるそれがレベル制ＭＭＯの理不尽さというやつだ」
「チッ」ヒュン
「転移――」
「行かせると思うか？」
「ひっ……」
「てめぇらには問答無用で牢獄に行ってもらう、コリドー・オープン！」
「畜生……」
「な、なぁ許してくれよ！ねぇ！……そうだ、あんた、私と組まない？あんたの腕があれば、どんなギルドだって……」
あばよ、現実ではこの罪を償えよ……

「……わるい、シリカ。君を囮にするようなことしちまって。ほんとのこと言おうと思ったんだけど怖がられると思って、言えなかった」
「街まで送るよ、でも街に入ったら俺は報告に行かなきゃなんないから」
「あ――足が、動かないんです」
「なんだよそれ……俺が緊張した意味ないじゃん」フッ
「⁉？……／／／」
ん？なんか俺した？顔赤くなったんだけど、あれ？なんかこれ二回目じゃね？

「カイトさん……行っちゃうんですか……？」
「あぁ……。数日前線から離れちゃったしそれに……報告もあるからすぐ行かねぇと」
「んじゃ、そろそろ行かねぇと……あと、レベルなんてただの飾りなんだこの世界での強さはただの幻想なんだ。それよりもっと大事なものがある。だからよ、次はリアルでまた会おうぜ。そしたらまたおんなじように友達になれるさ」
「はい。きっと――きっと」

シリカ編終了

みんな自分の相棒（剣）を作ってもらうには絶対に腕のいいやつのところに行ったほうがいい

おいっす～☆どうもカイトさんだよ～
今は何をしてるかというと、だいぶ前にアスナに紹介してもらった鍛治職人のとこに行こっかな～って思ってるよ☆
えっ？なんでかって？そりゃお前新しい武器にそろそろ変えようかと思っての行動だよ、さてそろそろ着くかな～
おっ！あったあった、そんじゃま入りますかね
コンコンコン　「お邪魔しま～す」
ん？誰もいないのか？ドアにＯｐｅｎって書いてあるから入ってだいじょぶだと思ったんだけど……ダメだったか？
「すいません、誰かいますか～」
「⁉？すいません、作業に集中していたので気付きませんでした。リズベット武具店へようこそ！ご用件はなんでしょう」
「あぁ、実は、この刀より軽い刀を作って欲しいんだ。知り合いの鍛治屋だとマスタースミスでしか作れないらしいから、それでここにアスナの紹介で来たんだけど……作業が忙しいならまた後日出直すけど……頼めるなら頼みたいんだ」
「大丈夫ですよ。あらかた終わってますので…それではその刀を貸してもらっていいですか？」
「ほいっ…意外と軽いから落とさないでね？」
「大丈夫ですよさすがに落としませんよ……うわっ！軽っ！」
「これより軽くですか……それだと材料が少し足りないんですけど」
「あぁ、それなら軽そうな素材をフルで持ってきた」……用意周到ね……これなら作れるわ……っは！わたし口調が……」
「別に構わねぇよ。俺は初対面の人でもタメ口だからよ。それに俺は別にそういう気にしねぇし」
あとは同い年っぽい人に敬語を使われると気持ち悪いってのは言わないでおくか…

「そ、ならいいわ…それじゃ作っておくから二日後に来てくれるかしら」
「おっけ二日後な、んじゃ頼んだぜ《閃光》と友達の鍛冶屋さん」
「えぇ、まっかせなさい！とびきりすごいのを作ってあげるから！」
「おう、頼んだぜ」
「あ、名前聞くの忘れた…まあアスナにでも聞けばいいか」

さて二日も暇になったしレベリングでもしようかな？けどあのスキルの熟練度も上げたいし……どうすっかな……
「カイト君。久しぶり」
「ん？おうおひさアスナ、どうした？これからリズベット武具店にでも行くんか？」
「そうだけど…カイト君もしかして行ったあと？」
「おう、今すぐにでも欲しかったからっていうのと、知り合いの鍛冶屋からマスタースミスでしか作れないって言われたから、この前アスナが教えてくれたじゃん？だからそんときの記憶を頼りにな」
「そうなんだ……言ってくれれば一緒に行ったのに……」
「ん？最後の方聞こえなかったなんつった？」
「な、なんでもないわよ！それじゃそろそろ行くね……あっ！そうそうまたコンビ組みましょう時間があった時に」
「あぁ、時間があったらな、んじゃまたな」

二日後に行ったのだが開いておらず次の日にまた行ってみるとキリトとその店主がイチャイチャしてカイトは心の中で（リア充爆発しろ!!）と思った

スキルのご利用は計画的に～青眼の悪魔を添えて～
（青眼ってさシャナみたいだよね）

おいっす～☆どうもカイトさんだよ～☆今日も一日頑張るぞい☆
今日は何をしてるかというと
「どっせーい！」ジャキン！
「グギャー！」パリンッ
「ふぅ～。とりあえずここら辺一帯は狩り尽くしたな」
はい実は七十四層の迷宮区にてレベリング中でした。まぁここら辺一帯全部狩り尽くしたからそろそろ帰ろうか考えてるけど……
「あっ！カイト君！迷宮区で会うなんて珍しいね」
「よっ、カイトが夜中以外に狩りなんて珍しいな」
「ん、アスナ、キリト、おいっす～☆てかお前ら俺をなんだと思ってんだ？バカにしてんのか？してんだな？よしならキリトデュエルするぞ、安心しろ今の俺はすこぶる調子が良い」
「し、しねぇよ！調子が良いならなおやらねぇよ！」
「逃げるのか貴様！許さんぞ！性の喜びを知りやがって…許さんぞ！」
「それ出したらあかん！そのおじさんはあかん！」
「まぁ冗談はさておき、おまえらこそ珍しいな。コンビ組んだとこ初めてみたぞ」
「まぁたまたま目的が一緒だったから成り行きでなってるだけさ」
「そうよ、元はと言えばカイト君がコンビ組んでくれないからでしょ……あれだけ誘ってるのに……」
「？時間があったらって言ってるだろ？俺は昼夜逆転してるから時間が合わねぇんだよ」
「……むぅ……」
可愛い……じゃなくて拗ねちまったなぁ……どうやって機嫌を直すか……せやいいこと考えた
「なぁ、キリト、おまえらって迷宮区の攻略か？なら俺もやらせてく

れ」（ヤム○ャ風）
「ああ、アスナがいいならな」
「行こう！絶対に行こう！すぐに行こう！」
「お、おう、げ、元気がいいな」
　そんなに俺と攻略したかったの？いや違うなただ俺がいたら攻略が楽になってラッキーっていう風にしか思ってないだろ
「そ、それじゃ行くか」

「カイト君ってどこまでマップを埋めてるの？」
「一応ボス部屋っぽいとこ以外は埋めてる」
「ならそのボス部屋まで行かないか？一応見るだけみてみようぜ」
「まぁ、キリトがそう言うなら行ってもいいが結晶は常に持っとけよ？そろそろ終盤に差し掛かってるんだワンチャン扉が閉まるってこともありえるかもしんねぇ」
「わかった…それじゃあ行くぞ」

「ここか……」
「さてさっさと下見して早よ帰ろうぜ。正直めんどくなってきた」
「そんなこと言ってないで気を引き締めて、何があるかわからないんだから」
「ういーす」
「はは、……じゃ開けるぞ……」
「ういーす」ギィ
　おおーこれはなかなか迫力があるな……さてあいつの武器はあの

剣だけか……けど盾持ちが相当いりそうだな…あとは行動パターンをみてやるか……

「グラァァァァァ!!!!」

「「き……きゃあああ!!」」

「う、うおっ⁉?」

「え、なんで⁉?見ないの⁉?行動パターンとか見ないの⁉?ちょっまっ⁉?アスナ離せ⁉?一人で走れる!その手を離せぇぇぇ!!」

このままかなりの距離引きずられた

俺の速度は止まんねぇからよ……おまえらも…止まるんじゃねぇぞ……

おいっす～☆どうもカイトさんだよ～☆
今何してるかというと
「あ、あはははは、いや～走った走ったw」
「走った走ったwじゃねぇよ、もう少し走ってたら俺のＨＰが無くなってたぞ⁉？おまえらほんとに俺のことをなんだと思ってんだよ……」
「でもカイト君わたしが掴んでなかったら戦う気でいたでしょ？警戒しろって言ったのカイト君だよ？」
「そりゃそうだけどさ……でも行動パターンは把握しておきたかったんだよな……」
「でも盾持ちは十人以上必要だって事は分かったんだからだいぶいい情報だろ？」
「……今回のボス攻略はなかなか骨が折れそうだね……そういえばまだお昼食べてなかったね…そろそろ食べようか」
「あぁ、そうだな」
「んじゃ俺一回街に帰るよ。昼飯持ってきてないし」
っとまぁ、こんな感じにフロアボスの顔を拝んできた帰り道なんすよ（顔見て逃げ帰ってきた）
「……よ、良かったら…い、一緒に食べない……？……ダメ…かな……？」
……俺もうここで死んでもいい……俺はもう止まんねぇからよ……おまえらも…止まるんじゃねぇぞ……（だ、団長ーーーーーー!!!!
（主）
キボウノハナーツナイダキズナヲ
「……俺でいいならいいよ」
「ほんとに？良かった～それじゃたべよ？」
えっ食べるシーンはだって？見せるわけないじゃん男の捕食シー

ンなんて需要ないじゃん。つまりはカットだよ（原点回帰）

「誰か来る……？」
「ん？マジ？……あれクラインじゃね？てことはあれは《風林火山》の人たちだな」
「お？キリトとカイトじゃねぇか！珍しいなおまえらが一緒にいるなんて」
「キリトが迷宮区攻略を手伝えって言ってきたから手伝ってる」
「まぁそうなんだけど言い方が違うだろ」
「それは置いといて、クラインにアスナを紹介しとかなくていいのか？」
「ああ、そうだな…クラインこいつは《血盟騎士団》の副団長のアスナだ」
「よろしくお願いしますクラインさん」
「……」
「あいクライン、うんとかすんとか反応しろよ」ペシペシ
「は！お、俺はクライン二十五歳独身です。よろしくお願いします！」
「…焦って変なこと口走ってんな」
「……なぁキリの字なんでおめぇの周りには女の子がいっぱいいるんだ⁉？一人くらい紹介してくれよ⁉？」
　まーた変なこと口走ってる…こりゃ相当女に飢えてんな…ん？なんかそこまで多くはないけど人がこっちに向かってきてるな…
「私は《アインクラッド解放隊》中将のコーバッツだ。この中にボス部屋までマップを埋めてるやつはいるか？いたら私たちに譲ってほしい」
「はぁ？おまえらマッピングがどれだけ大変かわかって言ってんのか⁉？」
「貴様らが有効活用できないから私に渡せと言っているのだ早く出したまえ」

「…ほらよしっかりとボス部屋までマッピングしてるやつだ。……その人数でボスに挑もうとするなよ確実に死者が出るそれに…おまえらの部下はいまかなり疲れてると思うが気のせいか？」
「私の部下はこのようなことで根を上げる奴らではない！ほら！立て！休む暇などないぞ！では協力感謝する」
　何が協力だ…脅迫の間違いだろ…それにあいつらの方が有効活用できないだろ
「カイト！なんで渡したんだ⁉？」
「結局マッピングしてある場所は公開するつもりだったんだ別に構わんさ」
「それより問題なのはあの人数でボスに挑むかどうかじゃないのか？」
「それはないだろキリトよぉ、さすがに軍の奴らでもボス攻略はどれくらいやばいかわかるはずだぜ？」
「……念には念を…か…俺はあいつらの跡をつけてみる」
「それならわたしたちも行こうカイト君だけじゃ心配だから……」
「なら行くか今から行けば間に合うだろ」

　なんか胸騒ぎがする…よくないことが起きるのか…？

「……ぐわぁぁ！」
　!!この声あいつらだ！　　ヒュン！
「⁉？カイト⁉？あいつが全力で走るってことはよくないことが起きてる急ごう!!」

　間に合えっ!!　　ヒュン　　ガッ！
「俺のスピードはみんなを守るためのスピードだ!!死なせてたまる

かぁ!!」
　刀最大火力スキル《天龍ノ太刀》
「オラァ!!ぶっ飛びやがれ!!」
「グラァァァァァ!!」
　よし少しだが吹っ飛んだ
「今のうちに転移結晶を使え!!」
「使えないんだ結晶が！」
　クリスタル無効化エリアか!!
「なら今すぐに扉まで走れ!!おまえらが外に出るまで俺が援護する!!」
「しかし……」
「うるせぇ!!がたがた喚くな!!早く撤退しろって言ってんだ!!」
「…くっすまない」
「グラァァァァァ!!」
「てめぇの相手はこの俺だ羊野郎!!」ヒュッ　　ガン!!
「グラァァ!!」ブンッ！
「くっ⁉？」ヒュン　　ズザァ
「やりやがるじゃねぇか……」
　後一撃も受けれねぇか……まずいな…やっぱあのスキルを使うしかねぇか
「カイト！大丈夫か!!」
「あぁ、もう攻撃は受けれねぇけどな」
「……カイト俺に十秒くれそこからはバトンタッチだ」
「ＯＫ十秒耐えりゃいいんだな？やってやるぜ、任せな」
「サンキュ、それじゃ行くぞ！」
　十秒もくれんのかありがとよキリト……俺ももう出し惜しみはしない!!」
　ユニークスキル《抜刀術》奥義二十八連撃《雷切》　　ズパンっ!!!!
「俺の速度(夢)が終わるって…えぇ⁉？…俺の速度(夢)は終わらねぇ!!!!」

「待たせたな、ここからは俺のターンだ!!」
任せたぜキリト……俺はもう疲れちまったよ……　バタッ

「……ト、…ん！カイト君！」
ん？誰か呼んでる…？
「カイト君！わたしのことわかる⁉？大丈夫⁉？」
「あ、あぁわかるよアスナ…どういう状況これ……？」
「途中で意識を失ったの……ほんとに大丈夫……？」
「あぁ問題ないさただＨＰがないだけでな」
「にしてもカイト最後にやったあのソードスキルなんだありゃ⁉？見たことねぇぞ⁉？」
「……ユニークスキル……発動条件は……知ってたら公開してるさ…」
「そう、だよな悪いな疲れてるのに質問しちまって…」
「気にすんな、そりゃ知りたくもなるだろうよ。」
「…ありがとな、それじゃ次の層のアクティベートしてくるぜ。これからゆっくり休めよ」
「俺の方こそサンキューな」

「カイト君…しばらくわたしとコンビ組んでもらえないかな、あまり無茶して欲しくないの…ダメ…かな……」
「……その言い方はずるいぞ……もちろんＯＫだ。しばらくの間よろしくな、アスナ」
「うん、よろしくね！」
こいつの笑顔を見たいから俺はこいつからの頼み事は断れないのかもな

七十四層突破

デュエルの前の静けさって異様に緊張するよね

おいっす～☆どうもカイトさんだよ～☆今何をしているかというと……

「引っ越してやる……絶対見つからない村に……」

「まあ、いいじゃねぇか。一度くらいは有名人になってみても。どうだ、一度講演会でもやってみちゃ。会場とチケットの手はずは俺が」

「するか！」

久しぶりにエギルの店にやってきたらキリトが不機嫌なんですよ～まぁ昨日の事が新聞に載ってたからかな理由としては。…俺もだいぶ活躍したと思うんだけど一切載ってなかった…それはそれで悲しいんだけど嬉しくもあるんだよな俺も目立ちたくはないし

「まずなんで俺だけなんだよ…カイトもヤバイことしてたろ…どうして俺だけ…」

「ザマァーｗｗｗ最後はお前が決めたんだからそりゃ目立つだろがｗｗｗ」プギャーｗｗｗ（指差し）

「クソッタレが……」

「まあまあ……」（苦笑い）

バンッ！

「よ、アスナどした？そんなに慌てて…」

なんか顔が青いけどなんかあったんか？

「どうしよう……カイト君……キリト君……」

「大変なことに……なっちゃった……」

なにかあったか？大変だことなんていつも通りだと思うんだけど……

「昨日……あれからギルド本部に行って、あったことを全部団長に報告したの。それで、ギルドの活動お休みしたいって言って、その日は家に戻って……。今朝のギルド例会で承認されると思ったんだけど……」

なにしてんだ……アスナ……それは承認されねぇだろ……
「団長が……わたしの一時脱退を認めるには、条件があるって……。キリト君と…立ち会いたい……って……」
「……マジで？なんで俺も？俺は関係……ないって言い切れるわけじゃないけど……」
「そんなわけないだろ……はあ…」
「……そりゃまぁ、心当たりは多すぎるけどよ……はぁ、さっさと行こうぜはよ終わらせてゆっくりしたい」
「……なら行きましょう…」
「アスナ、キリトと先に行っててくれ。ちょっち準備してから行く」
「？うん、わかった」
　なら早いとこ終わらせてヒースクリフのとこに行くか……乗り気じゃねぇけど……

「ういーす」ガチャ
「遅いよ！カイト君！」
「アスナ君、別に構わないさ。カイト君が私を待たせることは日常茶飯事だからね」
「カイト君！あれほど言ってるよね！人を待たせちゃダメだって！何回も言ってるよね⁉？」
「まぁまぁいいじゃねぇか、それより話ってのはなんだヒースクリフ？」
「ああ、話というのはだね……カイト君私とデュエルをしないかい？」
「は？何言ってんだおめぇ……それって賭けデュエルってことか？」
「話が早くて助かるよ。アスナ君の一時脱退を賭けるデュエルさ」
「……それはアスナ自身に話したのか……？」
「もちろん話しているよ。このデュエルにもし君が負けたら…君には

この《血盟騎士団》に加入してもらう」
「…そうか…それで、俺がもし勝ったら？」
「アスナ君の一時脱退を認めよう」
「……わかった。その条件を飲もう」
「⁉？カイト君⁉？」
「……けど一つ言っておく」
「…何かね？」
「……手を抜いたら容赦しねぇ。……それだけ言っとく」
「……わかっているさ、君がどれだけ強いのかも私は常々アスナ君から聞いているからね」
「……ならいい」
「それじゃあ場所と時間は私の方から指定をさせてもらうよ。アスナ君にでも聞いてくれて」
「……わかった」

「バカバカバカ⁉？カイト君のバカ⁉？わたしが説得しようとしたのに⁉？」
「そ、そんな怒んなよ。それにこれは俺のただの好奇心なんだ。あいつの《神聖剣》に俺の《抜刀術》が通用するのかどうかってのが……」
「だからといって売り言葉に買い言葉でいかないの⁉？もう、決まったものは仕方がないし、カイト君が負けるとは思わないけど心配なのは心配なの。それをわかってよ……」
「……わるい、あとお前の中で俺は最強なプレイヤーなのか？」
「……いいじゃん別に、どう思っても……」ぽんっ
「そんな顔すんな、大丈夫俺は負けるつもりはないさ。いくら相手が強かろうが関係ねぇさ。全部ぶっ飛ばすそれだけのことだ」
「……カイト君……そうだよね……頑張ってね⁉？」

「あぁ、お前はそこで見守っててくれ。そんじゃ行ってくる」

激突！《神速》ＶＳ《神聖剣》～可愛い人や美少女の頼み事って大体断れないよな～

おいっす～☆どうもカイトで～す☆今は何をしてるかというと…ヒースクリフとのデュエルをする前でござる。

「……どういう風の吹き回しだ……？……なんでこんな観客がいる……？…俺が負けると予想しての行動か……？」

「そんなつもりは一切なかったのだがね、ギルドのみんなが手配して、やったと聞いている」

「……そうか……なら怒るに怒れねぇな……なぁ、さっさとやらねぇか？待ってる時間がもどかしい」

「そうだな……そろそろ始めようか」

「……あぁ、さぁやろうぜ‼？」

キリトとのデュエルを見た後だからわかる…あいつの盾は硬すぎるのと攻撃にも応用できるってのが一番厄介なところだ…そこをどう攻略するのかがこのデュエルに勝つための鍵だろう…なら防がれる前に俺の出せる最高速で叩くか…おそらくソードスキルを使っての戦いは俺が圧倒的に不利になる…それにこのデュエルの一番注意しなきゃいけないところはあいつの剣が掠るだけでもデュエルが終了する…それくらい俺は紙装甲なんだ…常にそのことを頭に入れて立ち回らないといけない……かなり無理ゲー感がある…けどよアスナのためなんだどんな無茶でもやってやる‼？

《デュエルスタート‼？》

「シッ‼？」ヒュン

ガキン‼？

「驚いた…まさかここまで早いとは」

「それに反応してるお前も馬鹿げてるだろ‼？」

なんでだ⁉？なんで反応できるんだ⁉？俺の最高速でやってるん

だぞ⁉？……なんだこの違和感……ヒースクリフ自体は速度に追いつけていない……？けど盾で防がれる……明らかにおかしいな……もう少し様子見がてら攻撃の密度を上げてみるか……
「フッ⁉？」
ガキン⁉？「まだ上がるというのかね……毎回君には驚かされるよ」
防がれるけどやれないわけじゃない……なら俺の最高火力で押してやる⁉？
《抜刀術》奥義二十八連撃《雷切》
これで……決める⁉？
「オラァ⁉？」ズパン⁉？
「くっ⁉？」

「あれだけやってドローかよ……ほんと《神聖剣》は頭おかしいわ……」
「毎回毎回君には驚かされるよ……それで賭けのことなのだが……」
「あぁそういやこれ賭けデュエルだったっけ…思い切り忘れてた」
「ふふ、仕方ないさ。あれだけ学ぶことが多いデュエルだったのだからね」
「どうするさ俺は正直なんでもいいからよ」
「……なら、アスナ君の護衛を一週間してくれないかな？私たちのギルドではかなり攻略に行っているプレイヤーが多くてね、かなり人が少ない状況なんだ。それにアスナ君の一時脱退も認めるよ」
「⁉？そんなに簡単に言っていいのか？」
「団長の私が言うんだ誰も咎めはしないだろう」
アスナとか言いそうなんですけどねー、あとこんなんが団長でほんとに良かったのか？適当すぎやしませんかね？
「まぁ、お前が言うならそれでいいさ。そんじゃ俺は帰らせてもらうぜ」
「ああそれと」
「まだなんかあんのか？」

「一時脱退してもすぐに戻ってもらうことになるかもしれないからいつでも準備はしてもらいたい」
「？おう、わかった。そんじゃまたな」

「カイト君！しばらくカイト君のホームにいさせて！」
「なんだ突然。別にいてもいいけどそれって泊まるってことか？」
「うん‼？」
うわぁ屈託のないこの笑顔、心なしか凄くキラキラしてらっしゃる。
「しかしなんで俺の家なんだ？」
「ただ単純に行きたい！」
「……はぁ、わーったよ。ほれ早く準備しろ俺のホームに家具があんまないから買いに行かなきゃなんねぇ」
「はーい‼？」
ガキかよ……まぁ、そんなアスナも可愛いけどよせめてあんまり人のいるとこで騒がないでほしいな。目立ちたくないんだよほんとに……

《神速》ＶＳ《神聖剣》引き分けで終了

なんか知らんけど親になってた件について

おいっす～☆カイトさんですよ～☆
今何をしているかと言うと……
「フッ……！」スパン！
「……とりあえずこんなもんか……」
今は素振りをしているでござるまる。（作文風（二回目）
いや～あのヒースクリフとのデュエルで引き分けたのがすげぇ悔しかったからここ一週間くらいイメトレして素振りしての繰り返しをして過ごしてたぜ
「……ふぁ～。カイト君…おはよー」
「…おう、おはようさん」
……この通り実はアスナとずっと過ごしてます。…いや何もしてないからな⁉？本当だからな⁉？それに俺チキンだから何もできんしな…悲しくなってくるからこのくらいでやめよう……さて朝飯でも食べてこようかな

「カイト君今日は何をするの？いつも通り素振りとかして過ごすの？」
「それでもいいけど、今日はキリトが来るからあいつと話そうかなって思ってる」
「へぇー今日キリト君来るんだー」
「なんか大事な話らしい。そろそろ来るんじゃねぇかな」ピンポーン
「噂をすればなんとやら。ういー今出ますよ～」
「よっ久しぶりだなカイト」
「おうおひさ。にしてもわざわざなんで俺のとこまで来たんだ？メッセでもやりとりできただろ？」
「それなんだが……実はこの子がカイトに会いたいって……」
「へぇ俺に会いたいってか……そりゃかなりの変人だな」

「そうでもないと思うけど……それより話がずれたな。実はなその会いたいって子にカーソルがないんだ」
「へっ？か、カーソルがない⁉？そんなことあるか⁉？ＮＰＣでさえもカーソルがあんだぞ⁉？」
「ああ、俺も最初は驚いたさ。それも含めて中で話さないか？」
「それもそうだな…その子もずっと外に居させてるのは嫌だと思うしな」
　そういやこの子……何処かで見たことがある気がする……転生前に見てる気がする……転生……？⁉？転生前って……もしかしてユイか⁉？だとしたらなんで俺に会いたいんだ？
「？どうしたの？カイト君難しい顔して」
「ん？あぁ……その子のことについて考えてた」
「確かに……何処から来たのかな？教えてくれる？」
「わかんなーい」
「……なら、名前はわかるか？」
「？ユイだよパパ」
「パ……パパ⁉？」
「カイト……そういう趣味が……」
「カイト君……ちょっとあっちで話し合おうか……」
「ちょっと待て⁉？どうしてそうなった⁉？俺何もしてないだろ⁉？アスナ待ってくれ⁉？俺は何もしてない⁉？これは誤解だ⁉？キリト笑ってんじゃねぇ⁉？」
　なんで俺がこんなことになんなきゃいけねぇんだよ⁉？これはキリトの役目だろ⁉？俺関係ねぇじゃん⁉？
「さて、冗談はさておき…ユイちゃん。ほんとにカイトがパパなんだね？」
「うん！あとママもいるよ！」
「へぇー……それは誰なのかなカ・イ・ト・君？」
「お、俺はしらねぇよ！そもそも俺は女の子と親しい奴なんてリズとシリカとアスナぐらいだぞ⁉？お前らも知ってるだろ俺が友達いないの⁉？」

「じ、自分で言ってて悲しくないのかそれは……」
「悲しいわアホが‼?」
「それでママっていうのは誰なのかな?」
「ん」
　おいまさか……
「わ、わたし⁉?」
「うん!」
　やっぱりかーーー‼?

「ママー! 一緒に遊ぼ!」
「え、えっあっうん。けど……」
「いいよ遊んできな。丁度キリトと話したいことがあったから席を外して欲しかったし、……任せていいか?ユイのこと」
「うん…わかった。じゃ庭の方に行こうか」
「はーい」
　行ったか……
「さて、キリトなんとなく予想したこと言っていいか?」
「ユイちゃんのことか?」
「それ以外ありえんだろ。それで話を戻すけどお前……ＡＩがこの世界に来たって言ったら信じるか?」
「ＡＩってそんなことありえないだろ。突然何を言ってるんだ?……もしかしてユイちゃんのことか?」
「……あぁ、俺の予想が正しければな」
「……その予想ってのは?」
「まずカーソルがないってことだな。ＮＰＣでもプレイヤーでもカー

ソルがあるんだまずありえないことなんだ」
「……確かにな。俺は最初何かのバグだと思ってたんだが言われてみれば確かにそうだ」
「あとユイがもしＡＩならもしかしたらこっちに来るためのなんらかの装置みたいなものがあるはずだ。……明日それを探しに行こうと思ってる何か情報があれば教えて欲しいんだ」
「……わかった。何かあればすぐに情報をお前に渡すよ」
「サンキュ。…さてとりあえずこれからの方針が決まったな」
「ああ、かなり大雑把だけどな。というか最初に何処に行くか決めてあるのか？」
「まぁ、最初だし始まりの街にでも行ってみようかなって考えてるさ。そこになければまた別の場所に探しに行くさ」
「それもそうだな。それじゃユイちゃんをお前達に任せていいんだな？」
「問題ねぇさ。ここの家にはアスナがいるからな」
「ふっ…それじゃ俺はお暇するよ」
「あぁ、また暇なときにでも来いよそん時は少しもてなしてやるよ」
「はは、期待せずに待ってるよ。それじゃーな」
「おう」
　さて、これからまた大変なことになったから慎重にいかねぇとな……このことをアスナにも伝えねぇと…けどまだいいか…あんなに楽しそうにしてるんだからまだそっとしておいてやるか……

暇を持て余した《神速》の遊び

おいっす～☆カイトさんだよ～☆
さて今何をしているかというと……
「なんか怪しそうな場所ねぇかな～」
「そんな場所普通ないでしょ？マップも全部埋まってるんだし……逆にある方が奇跡みたいなものだよ？」
「そうだけどさ～……でも俺行ったことない場所の方が多いんだよな～…マップにのってるやつの半分もいったことないからな～」
まぁ、気づいたらこの世界に転生してたから行ったことのない場所がありすぎるんだよな。もはや初めて行くみたいになってるな
「でも確かにそこまで行ったことはないかもね……わたしもあまり行ったことがないところもあるし……」
「……まずは情報でも集めるか？……確かここにもプレイヤーいたろ？そいつらに聞けばいいんじゃね？その方が手っ取り早い」
「……そうだね。そうしてみようか」
はい、一層に来ております。なんでかって？そりゃシステムコンソールを探しに来たんだよ
でも正直始まりの街のこと何も知らないんだよな～転生してすぐにここを離れたから訳ワカメなんだよな～でも高い建物とかあるからそこに行けば人くらいいるだろ…逆にいなかったら終わりって感じだな
「パパー抱っこしてー」
「あー、はいはい。おいでー」
「わーい」
「よっと」
えーアスナだけじゃなくユイも来たんだよな～…なんでかって？ユイが「パパとママが行くなら行きたいー」って言い出してさ……断れる訳ないやろ‼？あんな子を一人にさせることなんて俺には出来なかったさ‼？……こんな熱くなるつもりじゃなかったけど熱くなっちまったスマンスマン

でもほんとにあんな小さい子に言われたら断れないんやなーって思った

……親バカってこういうことを言うんじゃねぇかな……？

「……ここって教会だよね？」

「そうだな。教会だな。それがどうした？」

「……ここに人が住んでるの？」

「住んでるだろ。じゃねぇと住む場所が宿屋しか無くなる。そこに泊まるにはコルが必要になるだろ？でも稼ぐにはクエストをこなすかフィールドに出て狩りをするかの二択だからそれより簡単に且つあまりコルがかからない場所が必要で最適なのがここなんじゃないか？」

「確かに……言われてみればそうかも……」

「パパ……あそこに誰かいる」

「あそこに？」

路地裏に？何かがあるのか？

「カイト君……行ってみよう」

「あぁ……その前に…ユイを頼む」

「うん。任せて」

さて、何をこそこそしてるのかしらねぇけど楽しそうなことしてるんだったらお兄さんも混ぜて欲しいな～

「おい、早くその武器を渡せよその金もだ」
「ダメだ！これは生活するためのお金なんだ！あんたらに渡してたまるか！」
「このガキ……言わせておけば……痛い目にあいたいようだな」
「くっ！」
「おいおいおい、大の大人が子供相手にカツアゲですかこのやろー。ここもだいぶ治安が悪くなってるなぁ」
「あぁん？誰だテメェは…ここじゃ見ない顔だな？」
「そりゃそうだろ、ここの街には住んでねぇからな。話を戻すけどあんたらほんとに何やってんだ？見たとこ軍の奴らか？」
「ほう？それを知っておきながらこの俺らに楯突いてくるのか？命知らずの奴だなｗ」
「へぇ～、じゃあ逆に聞くけどさ……俺のことしらねぇの？みんなから《神速》って言われてんだけどさ…聞いたことない？」
「は？こんな貧相なとこにあの攻略組が来る訳ねぇだろ。バカかお前」
「バカなのはお前らだよ」チャキ
「あ？なんだやろうってのか？」
「おう。というより俺にとっちゃ遊びだがな。ソッコーで終わらせてやるよお前らが認識するより早くな」ヒュン
「は？そんなことできる訳ないだろｗ笑わせるなｗ」
「なぁ、あんた腕は？」
「は？腕？はぁ⁉？なんで俺の腕がねぇんだ⁉？」
「言ったろ？〝お前らが認識するよりも早く終わらす〟って……あんたは舐めすぎたんだよ……ここが一番低い層だからって強い奴が現れないってそう思って今まで生活してきたんだろ？それに自分はレベルが高いからっていう理由でレベルの低い奴を脅して金なり武器なりを奪ってきたんだろ？そんなゴミに俺が負ける訳ねぇだろ……軍の偉い奴に伝えろ〝お前らの好き勝手にはさせない次こんなこと

があったら《神速》が潰しに行く〟ってな…わかったら帰れ」
「「ひ、ひぃぃぃぃ」」
「ったくお前ら大丈夫か？」
「「か」」
「か？」
「「か、カッケェェェェ!!？」」
「うお!!？」
「なんだよ今の!!？どうやったんだ!!？どうしたらそんな強くなれるんだ!!？」
　いや、俺がなんだよ!!？なんでそんな元気がいいんだよ!!？そんなかっこよくもないだろうに……
「お疲れ様カイト君。相変わらずすごいね」
「パパーかっこよかったー」
「お、おうありがとな。……そうだお前ら教会に住んでる奴らか？」
「うん。そうだよ」
「ならそこに大人の人とかいるか？」
「うんいるよ」
「なら話がしたいから案内してくれないか？」
「うん。わかった」
「ふぅ、とりあえずこれで情報は手に入るか……有力かどうかは置いといて……」
「兄ちゃんたちこっちだよ！」
「おう、今行くさ」
「カイト君」
「ん？なんだ？」
「……もし情報が有力じゃない場合どうするの？」
「それは……俺が今まで各層の行ったことのない場所に行こうと思ってる…だから相当時間がかかるかもな……」
「そうだね……」
「どうした？急に」
「……なんか嫌な予感がして」

「大丈夫何かあれば俺が守る。アスナだけじゃないユイも他のみんなも俺が絶対に守ってみせるさ」
「……うん。くよくよしててもしょうがないよね…それじゃ早くあの子たちを追いかけましょ」
「そうだな……」
　さて、俺にはあんまりＳＡＯの記憶がない…というより転生前の記憶が曖昧になってきている……ここでの生活に適応してきてるって感じかもな…それでも変わらない気持ちはある
「アスナ……お前だけは絶対に守る」

親の気持ち～実際に親になったことないからわからんけど～

おいっす～☆カイトさんだよ～☆

さて、今何をしているかというと……

「おりゃぁぁぁ‼？」スパパパン！

「パパー頑張ってー！」

「よっしゃー！いっちょいくぜ‼？」（べ○ット＆ａｍｐ．ゴ○ータ風）

「えっと……大丈夫なんですか……？」

「えぇ……もうあれは病気みたいなものですから……」

「誰が病気じゃアホ」

「あ、もう終わったの？」

「おう。ここら辺あんま手応えがなくておもんないわ」

「それはカイト君が強すぎるだけでしょ！」

「パパかっこよかったです！」

「おう。ユイも応援ありがとな」ナデナデ

「えへへ」

可愛い（確信）……っと話がずれたな。システムコンソールを探しに今はダンジョンに来てる。というか今会話に混ざってたけど……名前なんだっけ？まぁ忘れたけど…その人の目的がこのダンジョンに幽閉されてる人を助けたいんだと……まぁダンジョンモンスターのレベルが高いから助けてくれって言われてな……ほら俺って断らない体質だから……（激突！《神速》ＶＳ《神聖剣》を参照）まぁ二つ返事しちゃったよねって話（関○夫風）

さて、俺の転生前の記憶が正しかったらこのダンジョンにシステムコンソールがあったはずだ。……システムコンソールの前にすげぇ強ぇモンスターがいたような気がするけど……まぁ気がするだけだろ。気にしない気にしない（思考放棄）

「……ここが一番奥なのかな……？」
「なんじゃねぇか？もう進めるとこもないし……」
「‼？いた！……おーい！助けに来たぞー！」
　ん？なんか慌ててる……？なにかいるのか……？それほどまでに強大な力を持ったモンスターが……
「……そこから離れろ‼？殺されるぞ‼？」
「‼？まずい‼？今すぐ避難しろ‼？」
　やべぇぞこいつ……九十層くらいのモンスターじゃねぇかこいつ‼？カーソルが……赤い……？ってことは今の俺なら少し無理すれば倒せる……？……やってみる価値はあるか……？
「？カイト君……？」
「アスナお前もユイを連れて避難しろ……多分あの人がいる場所なら安全なんだろう……俺がなんとかする。頼むぞ……」ヒュン
「ちょっと…カイト君‼？」
「オラァ‼？こっち見やがれこの骸骨野郎‼？」ガキン！
「Ｇａａａａ！」ブン！
「うおっ！あぶねぇなこんちきしょう‼？」ヒュン
　思い出せ……あの時の感覚を……ヒースクリフとのデュエルの時を……！
「まだまだ終わらねぇぞ‼？こんなんでくたばってたまるかぁ‼？」ズパン！
「Ｇ、Ｇａａａａａａａａ！」
　うし！ダメージは稼げてる……！このまま押し切ってやる……！
「……俺の最高火力をてめぇに叩き込んでやる！覚悟しやがれ‼？」
《抜刀術》奥義二十八連撃《雷切》
「てめぇに……！受け切れるかぁ‼？」ズパン‼？
「Ｇ、Ｇａａａａａａａａ‼？」

まだ終わらねぇのか⁉？相当タフじゃねぇかこの野郎……！ダメだ！《雷切》の反動がでかすぎて動けねぇ……！くそっ！早まりすぎたか……！
「⁉？ユイ危ない⁉？今すぐそこを離れろ⁉？」
「大丈夫だよパパ…すぐに終わらせるからね……」ボワッ
「⁉？ユイ……お前……」
「はぁぁぁぁ！」ジュッ！
「Ｇａａａａａａａａａａａａａ！！！！」パリン！
すげぇ……綺麗だ……
「カイト君⁉？」
「アスナ……」
「もう！無茶しないでよ⁉？わたしがどれだけ心配したのか分かってるの⁉？」
「うっ……わ、悪い……カーソルが赤かったから少し無理すればいけるのかと……」
「仕方ありませんよ。パパはそういう人ですから」
「⁉？ユイ……そうか……もしかして記憶を取り戻した……？」
「はい……システムコンソールに触れた時に記憶が戻りました……」
「……なぁ、ユイ…はさ、ほんとはキリトのとこに行くはずだったのか……？」
「はい……ほんとはキリトさんのメンタルケアをする予定だったんです……けど私が行く前に必ず精神状態が安定するんです。……パパ…いえカイトさん。あなたの行動でキリトさんの精神が安定するんです。その理由を知りたくてカイトさんに近づきました」
そんなことがあったのか……確かにあいつが落ち込んでたら結構な頻度で声をかけてたけど……
「そんなことがあったのか……それと別に他人行儀にならなくてもいい。俺たちは家族だろ？それならいつも通りパパやママでいい…なんなら敬語も外してもくれ」
「ありがとうございますパパ。でも敬語は癖になってるので無理ですけど……パパ私はもうあと少しで消えちゃいます…ですからいつま

でもママと良好な関係を……」
「バカなこと言うな！絶対に消えさせるか！俺たちは家族だ！これからも続いてくんだ！この関係をたった二日で終わらせてたまるか！」
どっかにあるはずだ……！システムコンソールの中に必ず抜け道があるユイを消させてたまるか！……!!？あったこれだ！
「これでどうだ！俺のナーブギアにユイの魂を残させたこれで残ったろ？」
「はい！……ですが権限がない状態なので疲労がたまっちゃいました……休んでていいですか？」
「あぁ、構わねぇよ…ユイは頑張ったそれ以上でもそれ以下でもないゆっくり休んでてくれ……」
「カイト君……ユイちゃんは残ったんだよね？」
「あぁ、問題はないはずだ。これで一件落着だ」
これでユイのことは終わった……けどまだやるべきことが残ってるそれは……
ん？メッセ？一体誰から……は？偵察隊全滅？

色々考えても分からないもんは分からない～但し考えることはみんな辞めないで～

おいっす～☆カイトさんだよ～☆

っていう軽いのは置いといて…今何をしているかというと血盟騎士団のギルドハウスに来ている…昨日キリトからメッセが来て〝偵察隊が全滅〟したらしい…キリトも実際に見てないからなんとも言えないそうだがヒースクリフから連絡が来たから多分そうなのだろうと思っているらしい。…俺も今からアスナに連れらてヒースクリフのとこに行く予定だ……おっと考えていたらもう部屋についたらしい

コンコンコン

「入りたまえ」

「失礼します…団長今戻りました……」

「ああ、ところで…偵察隊全滅については聞いているかな？」

「はい…一体どういうことなんですか……？…その話は本当なんですか……？」

「ああ…本当だとも…私も認めたくはないのだがね…そこでわかったことがいくつかあってだね君たちに話しておこうと思って呼んだのだが…」

「何を躊躇ってる？早く言ってくれ…その情報で俺がどれだけ動けるかが変わるからよ」

「そうだね…まず今回もクリスタル無効化空間だと私は思っている。偵察隊とは別に他の人員を向かわせたのだがその人員も〝全滅〟した…そのことを踏まえて私はクリスタル無効化空間だと予想している」

「そう…か…」

そんな簡単に〝全滅〟するか？仮にも最前線で戦ってる人たちだぞ？……もしかしたら……

「…なぁ」

「ん？なんだね？」
「…もしかしたらボスの攻撃力…今までのより高いのかもしんねぇ…」
「…どういうことかな？詳しく教えてくれないかな？」
「…仮にも最前線で戦ってる人たちなんだそれなりに装備は整えてるはずだ…それに偵察隊ってことなんだ今まで以上に装備を整えるはずだろ？そんな簡単に〝全滅〟するのかって話だ」
「…つまりボスの攻撃力が上がっていると思うのかね？」
「…端的に言えばそうだな。けど正直なところ分からん。直感で言っただけだ」
「そうかその考え方は気づかなかった。カイト君の意見を踏まえて攻略会議の時にみんなに伝えよう」
「そうか。なら帰ってもいいか？レベリングもしなきゃならん」
「ああ、構わない。攻略会議にも出なくても構わない」
「？なんでだ？一応攻略会議にも出た方がいいだろ」
「ここまでしてもらっているのだからあとはこちらで君を活かせるようにしておく。だから君にはレベリングを頑張ってほしい」
「お、おう。なんかよく分からんけどとりあえず頑張るわ」
「フッ。期待しておくよ」
「んじゃ、失礼するぞ」
　何を期待してんのか分からんけどアスナを守るくらいには強くならねぇと…何かあってからじゃ遅い…それと百層のボスにも通用するようなしっかりとした戦術が必要だからこの機会にいろいろ試してみるか…（但し書くとは言ってない）
「…うし！そろそろ行くか！ここで考えててもしょうがねぇさっさと行くか！」（大事なことなので二回言いました）

次回へ続く……

久しぶりにやるものは大体忘れる

おいっす～☆カイトでごわす☆
さて今何をしているかというと……
「っし！準備もできたしそろそろ行くか」
さあここでわかった人はいるかな？多分いないと思うけど正解は……ボス部屋に向かうでした！すいません調子乗りました…ここ最近はなかなかボケれてなかったので久しぶりにボケて舞い上がってました…
さて、茶番は置いといて…そろそろみんな集合するところかな？んじゃあんまゆっくりしてると置いていかれるからさっさと行くか！

「お！カイトじゃねぇか。今回は遅かったな。みんな揃ってるぜ？」
「おっすおっすおっすおっすおっす」
「いやおっすおっすうるせぇなお前」
「おっすオラ野○雅子のマネをするアイ○ンテ○ティ田島のマネをするカイトだ」
「クウォーターポイントのボスなのに気楽だなお前…」
「うるせぇなぶっ○すぞ！こうでもしねぇと現実逃避できねぇんだ！オラの気持ちわかってんのか⁉？ぶ○殺すぞ！」
「さすがにこの世界でそのジョークはダメだ！今すぐやめろ！」
「へーいそろそろやめますよー」
「にしても気楽すぎないか？お前…こっちはどうなるのか心配でしかないのによー…」

「さっきも言ったろ？現実逃避だよ。気負いすぎたら気持ちが負けてる気がしてな」
「だからといってふざけていいとは言ってないだろ……」
「まぁなけどふざけたくなったんだよ仕方ないだろ。こんだけ空気が殺伐としてんだこっちも気持ちが落ち込んでくるわ」
「そりゃそうだけどよ……」
　そういや俺の立ち位置ってどこだ？攻略会議に参加してないから何もわからんのだが？
「なぁクライン。俺の立ち位置って「あ！カイト君ようやく見つけた！」お、おう。わりぃクラインなんでもない」
「おうなんかあったらまた呼べ」
「あぁそうさせてもらうぜ。そんで？なんで俺を探してたんだ？アスナ」
「うん攻略会議で話し合ってねカイト君は団長と組む方針になったんだ」
「……ヒースクリフとか……わかったやるだけやってみるわ」
「うん……でも危なくなったらすぐ下がるんだよ？」
「お前は俺の母親か！大丈夫心配すんないざとなりゃヒースクリフの盾に隠れるさ」
「それはそれでどうかと思うんだけど……」
「ま、安心しろ盾に隠れはしねぇけど無理しない程度に頑張るつもりだ」
「それならいいんだけど……団長にも迷惑かけないようにね？」
「だからお前は俺の母親かって！っとそろそろ行くみてぇだ自分のパーティーに行きな」
「うん……」
　ん？なんか元気がなさそうやけど大丈夫かいな？…あんまり考えないようにしよう…今はボス戦にだけ集中するか……
「諸君よく集まってくれた。これからボス戦に入る。集中して望むようにしてくれ。……それでは諸君武器を構えてくれ。これからボス部屋に入る！準備はいいな！」

「「「「おう!!?・!!?・」」」」
「それでは行くぞ！」
いよいよ始まるんだな……現実に帰るまであと少し……これに勝てば後２５階……ん？何か忘れてるような……何か大切な何かを……

次回に続く……

舞い戻りし神速前編

おいっす～☆超お久しぶりのカイトさんだよ～☆ん？メタイって？ソ、ソンナコトナイヨ（確信犯）

さてさてさーて今俺はなにをしてるかというと…

「総員いつでも動けるようにしておいてくれたまえ」

「「「おう！」」」　　「「「はい！」」」

……この通りボス部屋に入ったところですよ。はぁ～マジで憂鬱だぜボス攻略ってのは……」

「それは私も同感だ。しかしボス攻略をしなければここから脱出するのはできないだろう？」

「そうだけどよ……あり？もしかして口に出てたか？」

「あぁ。ガッツリとね」

「まぁ別に聞かれて悪いやつじゃねぇからいいけどよ……にしてもお相手さんはまだ出てきてないのか？」

「そのようだね……もしかしたらステルス能力があったりするのかもしれないね……」

「……いやそれはねぇだろ」
「…ほう？何故そう言い切れるのかね？」
「仮にあったとしたらすぐ俺たちを全員殺れるはずだぜ？そんな能力今更だろ。こんな上層部に来てから付けるもんじゃねぇ…俺はそう思うぜ？」
「なるほど……ではボスは隠れていると？そう思っているのかい？」
「……あぁ。隠れる場所があんまりないとこを見るとおそらく上に」
「上よ！」……ほらな？」
「総員回避！」
……うん。なんか…すまん…すぐに俺の考えを伝えれなくて……ってそんなことよりさっさとタゲを俺に移さねぇとみんなバラバラになって作戦が水の泡だ……
「……うし！いっちょ仕事しますか！」ザッ！

「さてさてさーて！骸骨野郎オラといっちょやろうぜ！」
「ｇｒａａａａａａ‼？」
「……フッ。やかましい野郎だが楽しくなりそうだ…‼？」
「ｇｒａａａａａａａ‼？」ブンッ！
「おっと。あぶねぇな俺みてぇにＡＧＩ極振りじゃなかったら当たってたぞ。…さぁどんどん攻撃してこいよ。一時的ではあっけどおめぇの相手は……俺だけだ……」

「ｇａａａａａａａ‼？」ブンッ！ブンッ！ブンッ！
「よっ、ほっ、よっと。どうしたどうしたおめぇの力はそんなもんか⁉？」
　って言ったわいいものの正直こいつの攻撃…密度が今までのボスより濃いな……おそらくこのまま避け続けたら集中切らして当たっちまうな……早めにあいつらが整ってくれりゃ話は別か……ん？いや待てよ。俺から積極的に行けばよくね？（ごり押し）
「この作戦（脳筋）が通用すればいけんちゃう？」
　キタ！マジ俺天才！（変換ミス：天災）
「…しゃオラ！俺とスケベしようや‼？」シャキン！
「俺のスピードについてこれるか⁉？」ズパッ！ズパッ！ズパッ！
「ｇａａａａａａ‼？」
　こんだけやってゲージ一本のうち十分の一か……よくよく考えたらヤバくね？（今更）…何がこの作戦通用するだよ…筋金入りのバカだったわ俺（今更）
「すまないカイト君‼？遅くなってしまった‼？」
「遅せぇわバカタレ危うくちょっと間違えたら死ぬとこだったわ‼？（自業自得）」
「それはすまない！何かお詫びをしなくてはね」
「それよりちょっとした情報をお前に教える一回しか言わねぇからよく聞いておけよ」
「あぁ。頼む」
「とりあえずあいつの攻撃の手段としてはあのデケェ鎌。後はやっぱり今までのボスと違って攻撃の密度がちょっと濃いってことぐらいだ。俺がタゲもらってる時はそんな感じだった。戦ってる最中にまだ俺が知らない行動も出てくるはずだからそこを考慮してくれ」
「……了解した。ではカイト君は少し回復してから攻撃に加わってくれ」
「……オーケー。出来るだけ早めに戻る…それまで持ちこたえてくれよ？」
「…ふふ。もちろんそのつもりさ」

回復してる最中に少しでも奴の行動を頭に叩き込んでおくか……
その方が俺的にはやりやすそうだしな……しかし……
「……変な胸騒ぎがする……このまま何もなきゃいいけど……」

to　be　continued……

舞い戻りし神速中編

変な胸騒ぎは確かにする……けど今は相当順調に削れてるはずなんだけどな……

「……どうにも胸騒ぎが晴れねぇ……」

さて回復は済んだしあとはちょっちボスの観察でもするか……にしてもやっぱ攻略組ってのは強ぇ奴ばっかだな……ほぼ攻撃をもらってない…ＨＰが減っていたとしてもガードした時の削りダメージぐらいか……このまま何もなく平和に終わってくれりゃいいんだけどな……だいたい把握できたし早く戻ろうかね～あいつらにＬＡ取られたくないしな

「……うし！さっさと戻って殴りに行こうかね」

「うわぁぁぁぁぁ‼？」

⁉？なんだ今の悲鳴⁉？

パリン！

「……は？」

まさか……誰か死んだのか……？……でもほとんどの奴らはＨＰ減ってなかったよな……？タンクの奴ら以外ＨＰは満タンだったはずだろ？まさかこの胸騒ぎって……⁉？

「……こいつがワンパンできる攻撃力を持ってるっていう知らせ……？」

それより早く戻らねぇと……！このままだと隊が崩れて……！
「……全滅しちまう……!!?」
それだけは絶対にダメだ！ここで全滅したら……！
「誰もこのゲームを攻略する人たちが集まらない……!!?」
それをさせねぇために俺は何ができる!!?全員に撤退を命令するか?……そんなん出来るわけねぇ…ここはクリスタル無効化エリアだ…転移結晶なんて使えるわけがない…それに撤退するには殿を誰かがやらなきゃなんねぇ…それを出来るやつなんてこの場にはそこまでいねぇ…強いてあげるならヒースクリフぐらいだろう…確かにあいつならなんとか出来るかもしれねぇ…けどあいつ自身どうなるかわからん…ならどうするか……んなもん考えなくても出てきたじゃねぇか……
「……命懸けであいつをぶっ飛ばすしかねぇみたいだな……」
もう一度呼び覚ませ……ヒースクリフとデュエルしたあの時の感覚を……あの感覚がありゃ【スカル・リーパ】に一泡吹かせられる……！

「うわぁぁぁぁぁ!!?」パリン！
「クソ！なんなんだよこいつ!!?あいつらのＨＰは満タンだったんだ

ぞ⁉？」
「ｇｒａａａａａａａ⁉？」ブンッ！
「うわぁぁぁぁぁ⁉？」パリン！
「テメェ⁉？よくもあいつらを⁉？絶対にぶっ殺してやる⁉？」
「⁉？迂闊に近づくな⁉？今すぐ離れろ⁉？」
「うおぉぉぉ⁉？」ブンッ！
　ガキン！
「何⁉？弾かれた⁉？」
「ｇａａａａａａａ⁉？」ブンッ！
（ここで死ぬのか俺は……）ガクッ
「避けろ⁉？今ならまだ間に合う⁉？」
（無理だ……これを避けられたとしても次いつまた殺られるかわからない……それならいっそ早くあいつらの元に……）
「諦めていいのか？そんな簡単によ」ガキン！
「え？」
　刀最大火力スキル《天龍ノ太刀》
「ｇａａａａａａａ⁉？」
「……今まで死んでいった奴らの仇を討ちにきた……すぐにへばんなよ？【スカル・リーパ】……！」

ｔｏ　ｂｅｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

舞い戻りし神速後編

「……今まで死んでいった奴らの仇を討ちにきた……すぐにへばんなよ？【スカル・リーパ】……！」

　って言ったものの結局は作戦を練ってはねぇんだよな……俺1人だけで殺やれるほど弱い相手じゃねぇのはわかってる……なら……

「……ヒースクリフ…アスナ…みんなをまとめろ。そして勝てる作戦を練れ。作戦を練ってる間こいつは俺がなんとかする…」

「それじゃカイトくんが……」

「…安心しろ。俺は死なねぇ。現実に戻るまで絶対に…」

「……任せてもいいんだね？」

「……あたりめぇよと言いたいとこだが…正直そこまで長く保てるわけじゃない……なるべく早くしてくれ」

「……了解した」

「……気をつけてね」

「……おう。任せろ」

「さてっと…さぁ、今度は俺とやろうぜ‼？今度は手加減なしでやってやるよ」

「ｇｒａａａａａａ!!?」ブンッ！ブンッ！ブンッ！
だいぶ冷静になれたからかわからんがあいつの動きが読めるようになってきた……右…下…斜め右上に流れるように切り裂く…大体の攻撃の派生がこれから成り立ってる……つうことは……
「……左がおろそかだぜ!?」
刀五連撃《雷禅》
「ｇａａａａａａ!!?」ドスン！
!?転倒か!?一気に仕掛ける!!?
「オラァ!!?」
《抜刀術》奥義二十八連撃《雷切》
「ｇｒａａａａａａ!!?」
よし!!?だいぶダメージは稼げた筈だ！ＨＰバーは何本削れてる!?
「二本と半分……」
やっぱ１人だとそこまで削れねぇか……せめてもう少し人出がいたら……！
「カイトくん!!?」
「!?……へっ。ようやくかよ…おせぇぞお前たち……」
「ごめんね……ちょっと遅くなっちゃった……」
「これでもだいぶ早くしたのだがね」
「はっ！こっちは１人じゃ手に負えねぇやつを１人でなんとか凌いでたのによ……よく言うぜ……それで？まとまったか？」
「あぁ。カイト君がここまで削ってくれたおかげで作戦の成功率が大幅に上がったよ」
「…で？その作戦ってのは？」
「それはね……」

「……マジで言ってんのか？」
「あぁ。おおマジさ」
「……お前らしからぬ作戦だな……」
「それは私も思ったさ。しかし、これ以外に方法が見つからなくてね」
「……まぁ正直これが一番妥当だな……」
「それじゃあカイト君は回復が済んだらすぐにきて…「いや俺も今行こう」……君は今あまりＨＰがないのだよ？」
「回復なんてもんは必要ねぇ……その作戦なら回復しなくても問題はない。それに……」
「それに？」
「回復なんぞあいつとの決着を終わらせてからでいい……今はあの骸骨野郎をぶっ飛ばしてぇ」
「フッ。君は本当に面白い」
「うるせ」
「ふふっ」
「…おい。アスナは笑うなよ」
「ふふっ。ごめんね？でもカイト君の調子がいつも通りになってきて嬉しいんだよ？」
「確かにこのボス戦が始まってから俺は気を張り詰めすぎてたかもな……うし！……アスナ最後一緒によろしく」
「え？」
「おそらく俺のソードスキルじゃ最後削りきるまでいかねぇ。だからアスナに最後一緒にスキル打ってくんねぇか？その方が相手を確実に削りきれる……だから…「うん！わかった！」…サンキューアスナ」

「よっしゃー‼? いっちょ行くぜ‼? おめぇら‼?」
「「「おう!!!」」」
（作戦としてはシンプルなものだ。私たちが少しずつ奴のゲージを削っていき最高火力を誇るカイト君のソードスキルで削り切ってくれないか?）
……本当にシンプルな奴だよ……けどそれのおかげで俺もだいぶ楽にやれる!
「…………カイト君! 決めたまえ!」
「…サンキュヒースクリフ……アスナ‼?」
「うん‼?」
「ハア‼?」ザシュ‼?
「graaaaaaaa‼?」
「……これで終わりだ【スカル・リーパ】……俺の最強を持っててめぇの最強を打ち砕く‼?《雷……切》!!!!」ズパーン!!!!!
「gaaaaaaaaaaaaa!!!!!」ドスン‼?

パリン!

「「よっ……しゃあ!!!!」」
……ようやくか……けどまだ上に階層があるって考えると……
「……これより強ぇ奴がまだごろごろいんのか……」
「カイトくん……お疲れ様」
「あぁ。アスナこそお疲れさん」
「今回は流石に疲れたよー」
「だろうな。今までよりも頭一つ出て強かったもんな……」
……それよりも俺はなんか忘れてる……何か大事な何かを……
「ん？クライン何してんだ？」
「あ？あぁこれか？今どれくらいプレイヤーがいないか数えてんだ……今回は見てるだけでも何人か死んでたからな……」
「……そう…か…それで何人いなかった？」
「…大体十人ぐらいだな」
「…思ったより多いな」
「……それよりすげえよな《神聖剣》ってのはあれだけやって黄色になってないんだぜ？」
……ＨＰバーが黄色になってない？…んなバカな⁉？あれだけの死闘を乗り越えてなお黄色になってない？

ドクン！

……あぁ。そういうことか……ようやく思い出した

……

チャキ！
「？カイトくん？」
ダッ！
「カイトくん！」

「……よう。……久しぶりだな……茅場……」

to be continued……

激突！《神速》ＶＳ《神聖剣》完結編～勝利の女神はどちらに傾く～前編

「……よう。……久しぶりだな……茅場……」ガキーン!!?
「……何故わかったのかね？」
「……お前まだ気づいてねぇのか？……今まで自分がしてきたことをよく思い出せよ？」
「……一体どういうことかな？」
「……わからねぇなら教えてやるよ……デュエルの時お前は重大なミスを犯した……そのＨＰが半分から減らねぇシステムを使ったことだ……！」
「……なるほど……確かにこれは私のミスだ……見破ったご褒美をあげなければね」
「なら今すぐこの世界にいる奴らを現実世界に返せ!!?」
「それは私を倒してからだ。もともと私は１００層のボスなのだからね」ピッ
「カイトくん……!!?」
「!!?アスナ！」
「な、なんだ!!?体が急に動かなくなった!!?」
「お前らまで……茅場！一体何をした!!?」
「なに。このゲームの中で最も強い麻痺だ。私を倒せばなくなるよ。……カイト君、君には私とデュエルをする権利がある。さっきも言ったように私は１００層のボスだ。倒せば残りの２５層を攻略せずに済む。私を倒せばこのゲームは終わるように設定してあるからね」
「……へぇ。っつうことはおめぇをぶっ飛ばせば俺らは帰れるわけだな？」
「その通りだよ」
「やめろカイト！もしオメェが負けたら死ぬことになるんだぞ!!?」
「……いや俺はやるさ…サンキューなクライン心配してくれて。けど今戦えるのは俺だけだ……それに俺はあいつとの決着をまだ着けて

ねぇ……だから決着をつけたい」
「カイト……」
「情けねぇな武士のくせによ…信じろおめぇのダチをよ」
「カイト……」
「おいおいエギル。そんな暗い顔すんなや。別に俺は死にに行くわけじゃねぇんだぞ？」
「……違えよ。おめぇを止めれない俺に腹が立ってんだ。……どうせ言ったて聞かないだろ？なら俺から言えることは……勝って来いそれだけだ」
「サンキュエギル。絶対に勝つさ。勝ってお前らを現実世界に返す絶対にだ」
「カイト……ごめん」
「な～に辛気臭くなってんだ？キリトさんよ～？別に謝られることなんてしてねぇだろ？」
「違うんだ……自分がなにもできないから悔しいんだ…動ければすぐに剣を取るのに……」
「まあまあ。そう落ち込みなさんなって。確かにそうかも知れんがよ…俺はなおめぇらがそう思ってくれるより応援してくれた方がより頑張れる。誰だってそうだろ？まぁその気持ちは凄えありがてぇよ。だからおめぇらは安心して俺の戦いを見守ってくれ」
「カイト…わかった。お前の全力をぶつけて来い‼？」
「あたりめぇよ」
「カイトくん……いつも君は自分勝手だよね……1層の時からずっとずっと一人で悩んで一人で自己解決して……私の誘いにも乗ってくれなくて……」
「……ん？なんか途中から俺のｄｉｓになってってないか？」
「…ふふっ。……でもね私は、いつも自分勝手でちょっと子供ぽい…そんな君が……

大好きです」

「……アスナ…お前それリズに教えてもらっただろ？絶対にお前じゃできねぇからな……」
「へへ。ダメだったかな？」
「はぁ。ダメじゃねぇけどよ…返事は後でする必ず……」
「うん。待ってる」

「はぁ。……つうわけだ。負けられない理由がもう1つできた。だから俺は絶対に勝つ。勝ってお前らの明日を手に入れる……だから……おめぇらはその目を見開いて俺の勇姿を見届けてくれ‼?」
「「おう‼?」」
「さて……待たせちまったな茅場……」
「別に大丈夫さ私は待つのは嫌いじゃないからね。それに負けるかも知れないからね最後くらい仲間との交流もいいだろうと思ってね」
「……絶対叩っ斬る。なんだったら木っ端微塵になるくらいまで切り裂いてやる覚悟しろ茅場」

to　be　continued……

激突！《神速》ＶＳ《神聖剣》完結編～勝利の女神はどちらに傾く～後編

「……絶対叩っ斬る。なんだったら木っ端微塵になるくらいまで切り裂いてやる覚悟しろ茅場」
「ふふ。それじゃあやろうか」ピッ
「…デュエル？……なるほど…全損決着のデュエルか……」
「どうしたのかね？まさか怖気付いたのかな？」
「フン！誰が怖気付くかよ。俺はただおもしれぇと思っただけだ……！」
「それなら良かった。では早速やろうか……」
「ああ……」ピッ
【ヒースクリフさんからのデュエルを承諾しました】
【後３０秒で開始します】
　あいつに下手な小細工は通用しねぇ……それはわかってる……けどなにも作戦なしじゃ話にならない……それにあいつはこの世界の製作者だ……ソードスキルの来る場所も把握してるはずだ……だからこそ何か策があれば……！

5……

ん？まてよ……あいつは俺の速度についてこられなかったはず

……前のデュエルではそう感じた……

4……

てことは……

3……

もしかしたら……

2……

これならいけるかも知れねぇ……なら……

1……

「俺の最強（抜刀術）を持って……てめぇの最強（神聖剣）を打ち砕く‼?」

【デュエルスタート】

ザッ‼?

「先手必勝だぜ‼?」ヒュッ‼?

「その程度の甘い剣筋じゃ私を倒すことはできないよ?」ガキン‼?

「んなこたぁ十分理解してるわ‼?」ガキン‼?ガキン‼?

クソ…まさか普通の斬撃に対応してるとは思わなかった……前までは普通の斬撃でも微妙なラインだったのによ……しっかりと対応してくるあたりほんとたち悪いな……でもよ……

「今度はおめぇが見切れねぇ速度でやってやらぁ‼?」ザッ！

《抜刀術居合　紫電一閃》

ガキン‼?

ズザザー‼?「……まさかここまで速いとは……それでいて重さもある…さすがだよカイト君…それでこそ戦い甲斐がある…！」

「…まさか防がれるとはな……俺の出せる最高速度でやったんだけど

な…ほんとてめぇの防御力は頭おかしいぜ……」
「そうでもないさ…1秒でも遅かったらきっと負けていただろう…それにさっきので防御したのにも関わらずＨＰがかなり減ったからね」
…つうことはラスト一撃くらいか……？なら……！
「これで決めてやる……！」
「かかってきたまえ……！」
《抜刀術》奥義二十八連撃《雷切》
ガキャ‼？
「これで終わりだ……さらばだカイト君」
「馬鹿が……！誰がこれで終わりだって……⁉？」
《スキルコネクト》《抜刀術》七連撃《龍仙剛撃》
ズパン‼？
「これで終わりだ……！」
「あぁ、だがカイト君もだよ」
「……そうみてぇだな……」グサッ！
「先に行っているよ」
「あぁ」パリン！
「カイトくん‼？」ダッ！
「アスナ…お前どうやって……？」
「愛があればなんとでもなるよ‼？カイトくん死なないで……‼？」
「はは、あんだけ言っといてこのザマだ…まだまだだな俺も……」
「そんなことないよ……‼？」
「はは、サンキュ。……アスナ俺がまだここにいるうちにさっきの返事しとくわ」
「いなくなるみたいに言わないで……！」
「はは、すまんすまん。でも事実なんだ俺のＨＰはもうないまだここに入れるのは奇跡みたいなもんだろ。それで返事だけど……お前と付き合うことはできない」
「⁉？どうして？」
「そりゃあこれから死ぬ奴と付き合うとか正気じゃねぇぞ？それだったらまだ現実に戻って俺よりいい奴探せよ。そこらへんにうじゃう

じゃいるから。その方が自分にとっていいと思うぜ？」
「いやだよ……！カイトくんじゃなきゃいやだよ……！」
「ありがとなこんな俺を好きになってくれて……そろそろ全部の感覚が薄れてきたな……」
「カイトくん⁉？死んじゃいや‼？」
　悪りぃな…もう耳も聞こえなくなってきたし声も出せねぇ……は、転生して約2年半か……たった2年半しか生きてねぇのか……それでも有意義に過ごせた……ありがとなここまで有意義に過ごせたのはお前らのおかげだ……それじゃあなお前ら…会える時があればまた会おうぜ

パリン‼？

ｔｏ　ｂｅｃｏｎｔｉｎｕ……

エピローグってやつさ

……ここは何処だ？…確か俺死んだと思うのだが……？とりあえず周りを見てみるか……特に何もないな…ただ夕焼けの空が見えるだけか…

「目覚めはどうだい？カイト君」

「⁉？…まさか…⁉？茅場さん…⁉？」

「ああそうだとも」

「どうして⁉？死んだはずじゃ……⁉？」

「言っただろう？先に行っていると」

「……なるほどな……で？俺をここに呼び出した理由は？」

「せっかちだなカイト君は」

「そうか？でもよ正直気になるだろ？もうそろそろで死ぬような人間を拘束しておいて」

「……なるほど。君は死んだと思ったのかい？あの戦いで」

「そりゃあな。ＨＰを全部削られたんだ当然だろ？」

「……確かにあの時私は削り切った。しかし、私のＨＰが無くなってからだろう？」

「？まぁそうだけど…それとこれとで話が別だろ？」

「まったく君は……鋭いのか鈍いのかわからない時が時々あるな」

「へ？つまりどういうことだってばよ？」

「結論から言うと君は死んではないと言うことだよ」

「ふぁ⁉？マジで⁉？」

「はぁ……マジもマジさ。元々このゲームは私のＨＰが無くなったら終わる仕組みだったんだよ。つまり君より先に私のＨＰが無くなってしまった…そこでこのゲームが終わったと言うわけさ」

「へぇ～。そりゃまたすげぇ仕組みだな～。……でもそうか……あいつらは無事に戻ったんか……」

「ああ。君の奮闘によりね」

「……なぁ茅場さん」

「ん？どうしたのかね？」

「あんたは今までいろんなゲームを作ってきたけどさ……

何を求めてこれを作ったんだ？」

「……ふむ。かなり難しい質問だね。……何を求めて…か……私はね昔からそれこそ子供の頃からこのアインクラッドのような物を求め続けてきた」

「……」

「そして〝それは〟現実にはなかった」

「……」

「ならいっそのこと私の求める世界を作ってしまおうとそう考えるようになった。そしてどのゲームを作っても私の目標は達成できなかった」

「……なるほどな……子供の頃から追い続けてるってことはあんたでさえも叶えれない〝夢〟ってことだな……」
「いや私の〝夢〟は十分に達成された」
「？なんでだ？」
「チュートリアルの時に言ったはずなのだがね……」
「へ？あ、あぁ今思い出した。そうかもうあん時に叶ってるってことか」
「そういうことさ……だがねカイト君。私はもう少し先の未来を見たくなったんだ…このアインクラッドで」
「けどそれは叶いそうもないと思うが……？」
「大丈夫さ私がここに入れるようには手を施してある」
「……用意周到なこって」
「ふふ。……さて、長話をしすぎたかな。君ももう少しで戻ってしまうからね手短に話そうか」
「お？他にもなんかあんのか？」
「ああ。君はこのＳＡＯの他にＶＲＭＭＯをやるつもりはあるかな？」
「ん？そうだな……やれるのであればやりたいが……」
「そうか…ならやはり君には渡しておいた方が良さそうだ」
「??なんのことだ？」
「今から渡すものはナーヴギアや他のゲーム機に使える代物だ。これをその機械に入れることによって〝ここで培ってきたスキル、ステータス、ある一部のアイテムは他のゲームに持っていける〟そういう代物だ」
「はぁぁぁぁぁ⁉？ちょ、おま、そんなもんなんで俺に……⁉？」
「私を見破った報酬だよ」
「んな⁉？対価にみあわねぇだろ⁉？」
「これは私のお節介さ…君はこれからいろいろなことに巻き込まれる……そう思ったからこれを用意した」
「……俺ってそんなに不幸な体質なの……？悲しくなってくるのだが……くるのだが⁉？」

「まぁいいじゃないか。おそらくこれで幾分か楽になるはずだ」
「フォローになってねぇよ馬鹿が‼？」
「はは。喜んでくれて何よりだ」
「……はぁ。まぁこれで俺の負担が減るのならいいや。ありがたくもらわせてもらうし、使わせてもらうさ」
「あぁ。そうしてくれ……ああそれと」
「今度はなんだ？」
「もうそろそろでもう一人来るだろう。せめて別れる時ぐらいは一緒に居させてあげようと思ったものだからね。この世界が終わるまでゆっくり話してるといい」
「？何を言ってんだ？」
「直にわかるさ。それではねカイト君。君には楽しませてもらった」
「お、おう。あ！それと最後に言いたいことがあったわ」
「何かな？」
「ＳＡＯ面白かったぜ‼？」
「ふっ。それは制作者冥利に尽きるってものだよ」
「またな茅場さん‼？」

行ったか……ほんとあの人は自由だな……さて
「一体誰が来るんかね？」
「カイトくん‼？」
噂をすればなんとやら
「アスナ……」

「カイトくん！」ダッ‼？
へ？なんか全力疾走してない？この距離で？さてはこれ……
「おい馬鹿やめろ！それは流石にＳ、グボォアァァ‼？」
「良かった……死んでないんだよね？」
「誰かがトドメを刺してこようとしてる人がいるのは気のせいですかね」
「良かった……ホントに良かった……」
「……すまんな悲しませるようなことして……でも俺はもうこの通りまったく問題ないさ」
「……グスッ。……ホントに？」
上目遣いやめてください死んでしまいます……
「あ、ああほんとに問題ないぜ……強いてゆうならお前をフっちまったことかな」
「…なら」
「ん？どうした？」
「……ならさっきの返事言い直して」
「……ふぁ‼？」
「…わたしのこと好きじゃない？」
「え、いや、あの、そう、ではなくてです、ね？あのなんと言いますか…その……好きです……」
「なら付き合って」
「えーっと……ほんとに俺でいいのか？」
「どういうこと？」
「いや、あの、なんと言いますか…こんな冴えないやつでいいのかと……それに俺かなりヘタレチキン野郎なんで…その釣り合っていないと思いますがそこのところはどうお考えになっておられますか……？」
「はぁ……カイトくんって変なところでちゃんと考えてるよね」
ため息の後にまさかの俺のｄｉｓ～‼？これはたまらずカイト選手もダウンだ～‼？……一人で何やってんだろ
「大体恋愛に釣り合う、釣り合わない関係ないと思うんだけど？好き

になったらそれでいいじゃん。なんだったらわたし達両想いなんだよ？……それにわたしはカイトくんじゃなきゃやだ……」
　おぉーっとここでまさかの恋愛の定義を語り始めたと思ったら俺じゃなきゃやだ宣言だー‼？これは流石のヘタレチキン野郎童貞のカイト選手もＫＯだー‼？……自分で言ってて泣けてくるなぁ……っとそれより返事しなきゃな……俺も覚悟を決めよう
「……わかった。アスナ……俺と付き合ってくれ……」
「⁉？うん！……うん‼？これから末長くお願いします‼？」
「…それはそれで違うんじゃないかな～とカイトさんは思うわけですけど……まぁお前が幸せならそれでいいさ」
　そろそろこの時間も終わりそうだな……後どのくらいここに入れるか茅場さんから何も聞いてないけど…なんとなくそんな気がする
「……なぁアスナ」
「ん？なに？」
「おそらくもう少しでここに居れる時間も終わる」
「そう…だね……」
「だからその前にな……せめて現実での名前を教えてくれないか？」
「え？」
「お前の名前を知らなかったら会いに行けないだろ……恥ずかしいこと言わせんな」
「ふふ。うんわかった。…わたしの名前は『結城明日奈』十七歳です」
「『ゆうきあすな』オッケーちゃんと覚えた……」
「じゃあ次はカイトくんだね」
「おう……俺の名前は『神居刀矢』俺も同じく十七歳だ」
「『かむいとうやくん』うん！わたしもちゃんと覚えたよ！」
「にしても現実の名前をそのまま使うって……」
「それはだって…わたしあんまりゲームしたことなかったんだもん！それに刀矢くんだってあまり言える立場じゃない気がするけど？」
「それはそうだけどよ……」
「ぷっ。あははは‼？」
　こんなに笑ったのはいつぶりぐらいだろうな……実際は最近のこ

とかもしんないしそうしゃないかもしれない……けどこれだけ言えるのは腹の底から笑ったのは久しぶりだ……っとそうこうしてるうちにか……

「もうそろそろだな」

「そうだね」

「次に会う時は現実でってことでいいか？」

「うん！」

さ～て久しぶりの外だ！一体俺の周りがどうなってんのか気になるとこだな……うし！

「んじゃあまた後でな」

ｔｏ　ｂｅｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

ＡＬＯ１
プロローグという名の駄文

おいっす～☆みんなお待ちかねのカイトさんだよ～☆え？誰も待ってないって？……泣いていいかな？久々にこのノリでやってスルーされるのは悲しくなっちまうぜ……

さて、話は変わるけど今俺は何をしてるかっつうと……

「はっ！はっ！はっ！」

……別に変なことしてるわけじゃないぞ…じゃあ何をしてるかって？走り込みだぜ☆

あのゲームが終わってから〝もう三ヶ月〟は経ってるしな…え？その間何をしてたかって？…全くしょうがないな～（トラン○ス風）結構ざっくり説明するぞ？

まず起きてから俺の右手には茅場さんからもらったあのＳＤカードみたいなもんが握られてたこれはおそらく…というか十中八九俺の〝スキル〟たちだろう……それにはあんまり驚かなかったけどさ…その二日後にまさかの出来事があった……その出来事っつうのは……

「あ！兄ちゃん！走り込みお疲れ様！そろそろお昼にしよう！」

「あぁ…そうだな……正直もうちょっと走りたかったんだけど……時間も時間だしな昼飯にするか……〝木綿季〟」

「やった～！久しぶりの兄ちゃんのご飯だ～！」

……はい。今ので理解した人はおそらく大半の人がそうだろう……まさかの病気が治ってる木綿季が俺の義妹になってた……なんでそうなったかの大体の予想はついてる…というか軽い流れで両親が引き取ったって説明された…まぁ別にいいけどさだって…木綿季が助かってるってことと俺の義理だが妹になっているからな！っと最初からだいぶ話がずれたな……それで起きてから約一ヶ月半だったと思うけどそれくらいでリハビリを済ませた…というより俺がめちゃくちゃ苦労して終わらせたに近いかな…それでリハビリ終わっ

てから〝あの人〟に頼んで明日奈のいる病院を教えてもらった……
見舞いに行ったけどあの須郷だっけ？なんかスイカだとか西瓜だか
忘れたけどまぁいい…あいつは徹底的に潰して割りたいと思った…
久々だぜここまで人を潰してやりてぇって感情を出したのは……な
んか殺気を少しぶつけただけでたじろいだからそこまで強いわけ
じゃないってのは理解した……だから明日奈を助けに行きたいって
なった……それがこの空白の三ヶ月間ってわけだ……あれ？ざっく
りするつもりが普通に細かくなっちまったぜ……まぁいいやとりあ
えず昼飯食って少し休憩してからまた走ろう
「兄ちゃん！早くご飯作って～！」
「はいはい。……全く世話の焼ける義妹だこと……」

プルル！プルル！
「んあ？誰からだ？……はい、神居ですが…」
『おう！カイトか？』
「その声は…エギルか？どうした？俺に電話なんかして？」
『今すぐに俺の経営してるカフェに来れないか？』
「なんでだ？とりあえず向かうけどよ。何か急ぎのようか？」
『あぁ。お前にとっても重要なことだ出来るだけ早めに来れたらきて
くれ』
「お、おう。わかった。すぐに行く」
『あぁ。また後でな』ピッ！
「兄ちゃんどっか行くの？」

「あぁ。知り合いからすぐにきてくれってな。ちょっと行ってくる。すぐに戻ってくるつもりだが…ちゃんとしてろよ？」
「わかってるよもう！ボクだっていつまでも子供じゃないんだからね！」
「はは。わかってるさ…んじゃ行ってくる」
「うん！いってらっしゃい！」
さ～て一体何があんのかね？正直もう転生前の記憶なんてほとんど残ってないからこれから何が起きんのかなんて全く想像もつかん。
……嫌なことじゃなけりゃいいんだが……

ｔｏ　ｂｅｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

2度目のリンク・スタート～初めてのことには誰もが弱気になるものさ～

おいっす～☆今日も元気に～頑張るぞい！どうもカイトさんだよ～☆

さ～て今俺は何をしているかというと……

「おう。案外早くきたな」

「よっすエギル。急に呼び出してどうしたんだ？」

「ああ。お前が欲しがる情報をたまたま見つけてな」

「俺の欲しがる情報？なんだそれ？」

エギルのカフェに呼ばれてきました～。…にしても俺の欲しがる情報ってなんだ？あんまり今は欲しいような情報なんてあんまないんだけどな～

「口で説明するより見てもらったほうがいいな」

「？いまだに掴めていないのだが？」

「まぁまぁ…っとこれだ」

「画像？なんでこれを？」

「これだけを見て何か思わないか？」

「？ゲームの世界ってことはわかるけど他になんがあるか？」

「それだけわかれば十分だ。次にこの画像を見てくれ」

「⁉？アスナ……⁉？まさか…このゲームの中に……⁉？」

「ああ。おそらくこのゲーム中にいる」

「このゲームの名前は⁉？」

「『アルヴヘイム・オンライン』通称ＡＬＯ…そこにアスナがいる」

「……そうか…通りで起きないわけだ…ここに囚われられているから現実世界に戻ってきてないのか……クソッ！」

今のところアミュスフィアやＡＬＯを買えるような金は無い…今すぐにでもこっちの世界に返してやりたい……‼？

「お前が今考えてることはわかる。ＡＬＯを買う金がないんだろ？」

「⁉？ああ。今の俺には生活するための金しかない…それにアミュス

フィアも買わなきゃならないだろ？今の俺じゃどうにもできない……」
「それをなんとかするためにお前を呼んだんだよ」
「どういうことだ？」
「まずアミュスフィアの件だがこれはナーヴギアでも代用が効く」
「それは本当か⁉？」
「ああそれとＡＬＯのゲームソフトだが…ほれ」
「⁉？それを俺にくれるってのか？」
「ああ…買ったのはいいがやる時間がなくてなここで取っておくならお前に渡しちまおうってな」
「サンキューエギル……！」
「いいってことよ。ただしいつかこの借りを返してくれよ？」
「当たり前だ……この恩はいつか精神的に……！」
「へっ！それがきけりゃ十分だ！ほらさっさとお姫様を救ってこいよ」
「…ああ！絶対にアスナを連れて戻ってくる……！帰ってきたらここでパーティーでもしようぜ！」
「お！それは楽しみだな！だったら尚更早くしねぇとな？」
「おう！今日はサンキューな！また時間があればここにくる！またな！」
「気をつけて帰れよ？」
「わかってる！」バタン！
絶対にアスナを取り戻す……！待ってろアスナ……！

「あ！お帰り兄ちゃん！」
「おう。ただいま」
「何してきたの？」
「…な～にちょっとした世間話だ、特にこれといったことはしてきてないよ」
「ふ～ん、そうなんだ～」
「あ、後それと兄ちゃんこれから晩ご飯までやらなきゃいけないことがあるから晩ご飯何食べたいか考えておけよ～」
「うん！わかった！」
　ガチャン！
「ふ～、なんとかごまかせたか……」
　木綿季をごまかすのはなんだかいただけないのだが、それも仕方ないことだから。こんな不甲斐ない兄貴を許してくれ木綿季よ……！
「っと。考えてる暇があるならさっさとＡＬＯに入らねぇと……」
　確かナーヴギアでもいいんだよな？ええっとナーヴギアはっと……
「あったあった、こんなとこにしまってたのか……」
　またこれを被る日が来るとはな……よしっ！準備完了！早速ダイブ！の前に
「茅場さんからもらったメモリカード入れないとな……」
　おそらくこのカードがなかったら現実世界の今より動けてないかもな…
「っと、またいらんことを考えてたな…時間がもったいないしさっさといくか！

リンク・スタート！」

to be continued……

ああ～娘が可愛いんじゃ～（お巡りさんこいつです）

おいっす～☆リア充爆死しろって思ってるカイトさんだよ～☆

今何をしているかと言うと……

「ここが…ＡＬＯの中か？」

ＡＬＯにダイブしてまーす。ていうか何気に物静かですな～。森がかなり奥まで繋がってるし…結構いい場所にログインしたんかね？

「っとそういやアイテムとかどうなってんのかね？茅場さんが言うにはほとんど入ってるらしいけど……」

正直武器だけなんとかしてもらえればなんでもいいんだけどな～

「…ほとんどが文字化けしてんのな…お！あった！いや～これ無くなってたらマジで辛かったぜ」

え？わかんないって？しょうがないな～（トラン○ス風）簡単に説明するとリズに作ってもらった剣だ。名前が《伊邪那美》。そこ！厨二病とか言うんじゃありません！いや俺も最初は思ったさ…けどもう慣れちったもんしょうがねぇだろ

さて他には何か使えるやつはっと……ん？なんだこれ？

「…正直見たことねぇやつなんだがオブジェクト化したほうがいい気がする……やってみるか」

鬼がでるか蛇がでるか運命の采配は…!?？ポチ

「パパー!!？」

「ユイ!?？」

現れたのは俺の可愛い可愛い愛娘でした……

「…ごめんなユイ、もう少し早く出してあげればよかったな」
「いえ、こうしてまたパパと会えて話せてるので大丈夫です！」
　なんてええ娘なんや……
「そっか。俺もまたユイと会えて嬉しいよ」
「えへへ、なんか照れますね／／／」
　ああ可愛いなーもう‼？可愛すぎてお父さん死んじゃうでしょうが‼？
「そういえばパパ。ママは？一緒じゃないんですか？」
「⁉？…あぁママは…アスナは一緒じゃない…けどこの世界にはいる」
「？どういうことですか？」
「ＳＡＯをクリアしてから現実世界に戻ってきてない人がまだいるんだ……」
「…もしかしてママがまだ……」
「あぁ、まだ帰ってきてない…けどこの世界にアスナがいることがわかったんだ。だから助けにきた」
「そうなんですか……わかりました。私も手伝います！」
「え？気持ちはわかるけどどうやって？」
「この世界にはナビゲーションピクシーっていうものがあって、それがこの世界の攻略に役立つそうです」
「それはわかったけど…それとユイが手伝うっていうのがどうやって結びつくんだ？」
「簡単ですよパパ。私はどうやらナビゲーションピクシーになれるみたいです。ほらこんなように」
「ほんとだ…小さいな……」
「…くすぐったいですパパ！」
「わ、悪い。…そうかこ、れで大体のことはなんとかなりそうだけど地形はどうにもならんからな…せめて誰か詳しい人がいたらいいんだけど……」

「そうですね…最初はこの森を抜けたらいいんじゃないでしょうか？」
「それもそうだな。ずっとここにいるのは何も進展がないからな」
「はい。けどどっちに向かいましょうか？」
「最初は無難にまっすぐ…ん？なんか聞こえないか？」
「…そうですね…誰かいるのでしょうか？」
「声のした場所までは把握できるか？ユイ」
「はっきりとはわかりませんがおそらく左側です」
「それさえわかればいいさ。さてさっきの音からして少し急いだほうがよさそうだな」
「そうですね。急ぎましょう！」

ｔｏｂｅｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

男ってたまにカッコつけたくなるよね

おいっす～☆お巡りさんのお世話になりかけたカイトさんだよ～☆え？軽く言うもんじゃないって？それは俺が一番わかってるよ…

さてそんなことより今何をしているかと言うと……

「だんだん音に近づいてきてるから方向はあってるな」

「はい！それにプレイヤーの気配が複数人感じられます！」

「サンキューユイ！あとは危ないから胸ポケットにでも入っててくれ！」

「わかりましたパパ！」

音のする方に向かって走ってました～ってふざけてる場合じゃなさそうだな…音からするに1対複数人の可能性があるな……もう少し急ぐか

「…もうそろそろだと思うが……見えた‼？」

「……いい加減諦めてくれないかな⁉？」

「そういうわけにはいかねぇんだ小娘！そっちこそいい加減吐いてもらおうか！」

何が起きてんだ？言い争い？もしかして心配して損した系？…いやにしてはあの赤い奴らは言葉づかいや態度が悪くねぇか？……もう少し様子を見てからにするか……

「お前ももう逃げられないだろ？こっちは6人いるんだしな」

「へ！お前が悪いんだぜ？さっさとすればいいものをわざわざこんなに手間かけさせやがって」

「お前らなんかに言うもんか！べー‼？」

「おま⁉？ふざけやがって‼？俺を怒らせたらどうなるか思い知らせてやるよ‼？」

ありゃ？これやばくね？最大級にあの娘やばくね？これは流石にいかねぇとマズいな……しかしどうやって出ていくべきか……まぁ普通でいいか

「死ねやぁぁぁ‼？」

「すいませーん。ちょっと道聞いてもいいですかねー？」

「な、なんだお前⁉？どっから来やがった⁉？」
「え？どっからって…そこの茂みからですけど……」
「なんで〝スプリガン〟が〝エルフ領の森〟から出てくんだよ⁉？」
「いや～なんでって言われましてもね～ログインしたらここにいたんすよね～」
「カゲミツさんコイツもしかしたらあの娘のことを逃す作戦では？」
「…なるほどなお前はこの娘の味方なのか」
「へ？いや何言ってんすか？初対面ですけど…」
（ちっ！思いの外バレるのが早かったな…アイツ鋭いな……）
「いやならそんなにフレンドリーに〝サラマンダー〟に話しかけてこない普通はな」
「へ？そうなんすか？自分このゲーム初心者なんでそこのところよくわからないんすけど…」
「…カゲミツさん見られたんですから一緒に殺っちゃった方が効率よくないっすか？正直見てるだけでイライラが止まんないっす！」
　俺の方が止まんねぇわ⁉？あ～あこんな立ち回りするんじゃなかったな～普通の人たちならこれでいけるんだけどな～
「……お前に恨みはないが見られたんだここで死んでもらう。俺らに会ったのが運の尽きだと思うんだな」
「つうわけださっさとくたばってくれよ⁉？」ブン！
　ここで襲いかかってくんのかよぉぉぉ⁉？めんどくせぇがやるしかねぇな⁉？

「……おせーよ」ヒュン！
「は？」
「悪いなそっちがその気なら俺も少しは本気でやらせてもらうぞ」
久しぶりの戦闘だ気張って行こうぜ《伊邪那美》‼？
「まずは先に攻撃してきたテメェからだ」
「ヒッ！」ズパン！
《抜刀術居合疾風雷鳴》
「…まずは一人。どうせこのゲームは死んでもリスポーン出来んだろ？なら少しは楽にできる」
人を殺したって言う罪悪感がＳＡＯの時より軽くなるからな……
「こ、こいつめちゃくちゃ強いですよ⁉？カゲミツさん‼？」
「…慌てるな俺がやる」
「へぇ次はあんたが相手してくれんのか？」
「…楽に死ねると思うなよ？小僧……」
「その言葉そのままそっくり返してやるよ…」
…コイツ少しできるな……油断しない方がよさそうだそれに……こんなとこで立ち止まってる暇なんてねぇからな‼？
「…一気に終わらせる」
「なに？」
《刀八連撃八岐大蛇》
「ふぅこんなもんか…そこのあんたもう帰んな。もう二度とこんなことすんじゃねぇぞ？」
「は、はい‼？すみませんでしたー‼？」
「一件落着っと！」
「…あんた何者？」
「ん？俺は今日ログインしたばっかのしがないただのプレイヤーさ」
「ただのプレイヤーがあんな異次元の動きなんかできないでしょ…」
「それも含めて色々と説明しようか」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
……

弄るのは大好きだけど弄られるのはちょっと無理ってやつ結構いるよね

おいっす～☆いつでも暇人カイトさんだよ～☆……自分で言って悲しくなってくるな……

さてそんなことより今何をしているかというと……

「…君ほんとに今日初めてログインしたプレイヤー？すごい慣れてた感じがしたんだけど…」

「本当やで。まぁ戦うってことに関してはベテランだとは自分で思ってるけど」

まぁ理由はそれだけじゃなくて他にもいっぱいあるんですけどね～…ってふざけてる場合じゃなかったな

「もしかして今までＰｖＰとかそういうのが多いゲームをして来たの？」

「あぁ～まぁ実際そうなんだけど近からず遠からずって感じかな」

「？どういうこと？」

「確かにＰｖＰだったりは色々して来たけどさモンスターを狩るっていうのが一応主流ではあったな」

「へぇ～ちなみにゲーム名はなに？」

ん～これって言っていいやつなんかな？自分には利益はないから言ってもいいと思うけど…どこまで話していいのやら……

「パパ言ってもいいんじゃないですか？」

「ユイ？」

「え!?？もしかしてナビゲーションピクシーそれ!?？」

「あ、あぁ一応その類ではあるな」

「？一応ってどういうこと？」

ヤベェェェェ!!？余計なこと言っちまったぁぁぁぁぁ!!？

「パパ余計なこと言いましたね……」

まったく持ってその通りでございますユイ様……

「というかさっきからそのナビゲーションピクシーが君のこと〝パパ

〝って呼んでるのはなんで？……もしかしてそういう趣味がある人……？」
「ちげぇぇぇよ‼？全く持ってそんな趣味はない‼？断じてない‼？」
「ならちゃんと説明しないとこの先疑われ続けますよパパ」
「はい……ちゃんと説明します……」
「その説明の前に私たち自己紹介してないですよね？今のうちにしちゃいましょう！」
「……確かに、今のうちにやっちゃいましょうか」
「ウィッス…」
「私からしちゃうね。私は〝リーファ〟、種族は見ての通り〝シルフ〟だよ」
「んじゃ俺も簡単にではあるが…俺はカイト、種族は〝スプリガン〟ログインしたときになんでか知らんがこの森にいた。んでこっちが……」
「はい！私はユイです！パパの子供であり今はナビゲーションピクシーをしています！」
「…あんたやっぱりそういう趣味が……」
「だからねぇって言ってんだろが‼？…なんでユイが俺の子供なのかを含めて俺のことをいろいろ話すからこれ以上そういう風に言わないでくれ……そろそろ俺のメンタルが折れて自害しそうになるからやめて……」
「ゴメンwゴメンwあまりにも反応が面白くてw」
「……それもそれで腹立つな」
「それは置いといてさっきの話に戻るんだけどなんでそんなに強いの？」
「あぁ～それはな……

ＳＡＯってゲーム知ってるか？」

ｔｏ　ｂｅｃｏｎｔｉｎｕ……

子供に説教されるってかなり心に来るんだね……

「ＳＡＯってゲーム知ってるか？」
「…知ってるも何もかなり世界的に有名なゲームじゃない…もちろん悪い方でのね」
「ハハ、確かにそうだな。けど俺は俺で楽しかったけどなあっちでの生活は」
「〝あっちでの生活〟って……もしかして『ＳＡＯ帰還者』⁉？」
「おう。それに自慢じゃねえが一応攻略組だったぜ」
「一応って…そりゃ強いわけね……それにしてもかなりというかすごくスピードが早かったんだけど…あれってどういう仕組みなの？」
「あぁ～あれはちょっち特殊でな…簡潔にいえば茅場さんからの報酬で〝ＳＡＯ内で俺が使ってたスキル、ステータス、ある一部のアイテムを他のゲームでも使える〟っていうバカげてるモノをもらってな…」
「確かにバカげてるけどだからといってそんなスピードでないでしょ⁉？」
「チッチッチ！甘いな～リーファ！」
「どういうこと？」
「決まってんだろ？俺のステータスがＡＧＩ極振り…いわゆるスピード極振りのステータスだってことよ！」
「……あんた命かかってるのにそんなアホなことしてたの？」
「いやまぁ確かにそうだけどさ…俺だって真剣に悩んだんだぜ？まぁ辿り着いた結論が〝当たらなければどうということはない〟っていう素晴らしい答えが……」
「パパ…それってつまり脳筋ですよね？何も考えたくなかったんですよね？」
「いや、あの、その、えっと…はい…全くもってその通りです……」
「いやユイちゃんに…子供に言い負かされる親って……」
「そんなこと言ってもさー！ほんとに当たんなかったらダメージ受けないしいけると思ったんだよー！…まぁ最終的にはかなり被弾が多

かったけどさ……」
「いやダメじゃん⁉？」
「っと。かなり話が脱線したな」
「パパがちょっと余計なことを言うからです！」
「はい…すみません……」
「まぁまぁ…それにしてもここまで話聞いててさ少し疑問に思ったんだけど…」
「うん？何かね？」
「どうしてカイト君はＡＬＯに来たの？」
「⁉？……そう…だな……〝ある目的〟を達成するため…かな」
「その〝ある目的〟って？」
「ユイにとっての〝ママ〟を現実世界に戻すために」
「どういうこと？」
「まだ『ＳＡＯ帰還者』で現実世界に帰って来てない人がいるのは知ってるよな？」
「うん。ここ二週間ぐらいずっとニュースでやってるよね」
「そのうちの一人がこの世界にいるって話を聞いてな。それに証拠写真も見せてもらった。そこに映ってたのが……」
「ユイちゃんの〝ママ〟ってことね」
「そういうことだ」
「私にとってもパパにとっても大切な人なんです」
「ユイちゃん……」
「そういうわけだ。俺たちはすぐにでも〝アイツ〟の元にいかねぇと行けねぇ…」
「けどパパ。私たちはここの地形も把握してませんしなんだったらマップも持ってませんよ？」
「そうなんだよなぁ…とりあえずこの森を抜けてからじゃないと今いる場所を把握できんしな……」
「あのさ」
「ん？どうしたリーファ？」
「カイト君たちがよければだけど私が案内しようか？」

「へ？いやいやいーよ！そこまで迷惑かけるわけにはいかねぇからそんな提案しなくても……」
「助けてもらったお礼…まだしてないから……それにそんな話を聞いたら放っておけないよ」
「んーいやでもな…」
「パパお願いしましょう」
「ユイ…けどなー……」
「確かにパパのいうことは一理あります…けどむやみやたらに移動するだけだとかなり時間を使ってしまいます。ここはリーファさんの提案を受けて効率よくいきましょう」
「……わかった。確かに無闇に行くと変に時間を使っちまう……リーファ道案内お願いできるか？」
「任せて！こう見えても大体の場所は把握してるから大船に乗ったつもりでいてね！」
「うし！これでようやく目的を達成するためのスタートラインに立てた！よろしく頼むぜリーファ！」
　ちょっと時間かかるかもしんねぇけど待ってろよ…アスナ……絶対現実世界に戻してやるからな……

ｔｏ　ｂｅｃｏｎｔｉｎｕ……

人に言われて初めて気づくことって多いよね

おいっす～☆少し別のものに集中するとちょっと大事なことを忘れるカイトさんだよ～☆え？それは重症だって？な、何を言ってるのかな？べ、別に大丈夫じゃないかな？（かなりの重症）

さて今何をしているかと言うと……

「案内は確かにするけど目的の場所ってどこなの？」

「あーそういや言ってなかったな。えーっと真ん中のでっかい木…【世界樹】だっけ？確かそんなとこだった気がする」

「え⁉？うそ⁉？あそこは難易度が異常に高いんだよ⁉？そんなとこに行くの⁉？」

「うん？そんな高いん？こっから見た感じはそんな風には見えないけどな～」

「それはそれでどうかと思うけど…でも難易度はほんとに高くて今ＡＬＯにいる全種族の精鋭のプレイヤーが連携をとらないとおそらく勝てないって言うふうに言われてるくらいには難易度が高いダンジョンなんだよ」

「へぇー。ま、俺には関係ないっすけどね～」

「え？もしかして一人で攻略しようとする気？」

「おう」

「馬鹿じゃないの⁉？私の話聞いてた⁉？」

「おうちゃんと聞いてたさ。でもよはっきり言って無理な話だぜ？全種族の精鋭たちがしっかりとした連携を組むなんてよ」

「どういうこと？まぁわからなくはないんだけど…」

「んーなんか心当たりがあるような言い方やな」

「うん…だって種族間であまり仲が良くないんだよ」

「ほえーなるほどな。なら尚更無理だな」

「それでどうして連携ができないの？」

「連携ができないってわけじゃねぇんだけど…どうせ挑むってなった時連携をとるための練習とかすると思うんだけどさ、そこで一悶着が起きるかもしれんし…あとはいくら連携が取れても本当に完璧な連

携って取れないんだよ」
「そうなの？だって指揮を取る人だっているわけでしょ？」
「いたとしてもだ。常日頃から連携をとってるわけじゃないし…必ずしも自分にあってるプレースタイルではないわけだから集中力もすぐに切れる」
「へぇーやっぱりそういうことをかなり経験して来たからわかるんだね」
「そうだな…といっても俺自身はあんまり人に迷惑かけたくなかったからパーティーとかそんな組まなかったな」
「へぇー……ん？ってことはソロプレイヤーだったってこと？」
「おうほぼ一人で活動してたな」
「すごいね……過酷な状況下でソロでしてたなんて……」
「うん？そうか？」
「パパ……パパは気付いてないかもしれませんがはっきり言って異常なことをしてたんですよ？たった一人で迷宮区攻略、クエストの消化、マップの公開、マップ公開のためのマップ埋め等々…とても一人でできることじゃないですよ」
「あぁー…確かに…ってことは俺頭おかしいほど色々やってたんだな……」
「素性を聞いてなおかつ今の話を聞いての質問なんだけど…」
「おうなんだ？」
「カイト君って何者？」
「うーん…あえて言わせてもらおう！俺はただのゲーマーだ！」
「いやどちらかというと社畜に近いんじゃないですか？」
「オーマイゴッド‼？ユイに言われるとどストレートに心に来る‼？」
「あ、あはは」
「さて話が長くなったしさっさと行こうぜ時間がもったいねぇし」
「立ち直んのはっや⁉？」
「そりゃ切り替え早くないと死ぬ場面が多いからな」
「はぁもうツッコムのも疲れたよ」

「さぁさぁ行こうか!!?」

to becontinu……

空を飛ぶってイメージじゃなんとかならない部分ってあるよね

おいっす～☆プリ○ネってなんでこんなに楽しいんだろうってずっと考えてるカイトさんだよ～☆えっ…作者の心の中が丸見えだって？ソンナコトナイジャナイデサスカーという茶番は置いといて…今何をしているかというと……

「そうそう！そんな感じで飛行するんだよ！」

「なるほどな…覚えれば割と簡単なんだな……」

「でもすごいね。少ししか練習してないのにここまでできるなんて……」

「確かにそうですね。いくらパパの要領がいいとしても初心者なのにここまではできませんよ」

「あぁ～確かにな…正直リーファの教え方がうまいんじゃないか？」

はい私ことカイトはリーファに飛び方を教わっていますまる。いや～リーファって教え方うまいんやね。俺自身はそこまで要領いいわけじゃないんだけどすんなり体に教えられたことが入ってきてな……今は大体空を自由に飛べるぐらいまでは成長できたんじゃないかな？知らんけど

「この調子ならすぐに行けそうだね！」

「そうだな～。……うし！そろそろ行くか！」

「パパ大丈夫ですか？あまり慣れてないのでもう少し時間をかけてからでも……」

「大体慣れたし後は移動しながらでも調整は効くから問題はねぇよ」

「パパ…そういうことじゃなくてですね……」

「ん？どういうこと？」

「はぁ……ユイちゃんはカイト君のことが心配なんだよ」

「そうです！私はかなり心配してるんですからね！色々なことに無茶しながらやるんですから！」

「うっ…心当たりが多すぎて反論できん……けど今回ばかりはほんと

に大丈夫だからな？」
「うー…少し怪しいですがそう言うならわかりました」
「心配してくれんのはありがたいけど俺はいつもできると思ってやってるだけだからな？」
「それって結局油断してるだけじゃない？」
「……ノーコメントで……」
「はぁ……ほらあんまりのんびりしてられないんでしょ？早めに出来るだけ【世界樹】まで近づいちゃお」
「…そうですね。そうと決まれば行きましょう！」
「へいへい……」
　なんでこうも女子ってこんな感がいいんだよ……
「ほら！何ぼーっとしてんの！早く行くよー！」
「早くしないと置いて行きますよ！パパ！」
「ちょっ⁉？待てよ⁉？」
　……そして時々考えてることがわからないような気がする……もう訳がわからないよ……

「パパ。目の前からプレイヤーの反応があります」
「プレイヤー？そんな不思議なことなのか？」
「いえそこまで不思議というわけではないんですが…猛スピードでこちらに向かってきてます」
「なるほど…ならちょっと不思議だな」
「はい。特にこちらには何もなかったはずなんですけど」

「リーファなんか知らん？」
「あーもしかしたらそれシルフ領の仲間かも」
「ん？どういうこと？」
「サラマンダーたちに襲われる前に援軍呼んどいたからもしかしたらそれかも……」
「なるほどな」
「もう少しでこちらに着きます」
「リーファちゃーーん‼？‼？」
「ゲッ！レコン⁉？」
「おん？もしかしなくても知り合い？」
「うん……なんであいつが……」
「？なんか彼とあったん？」
「…いやカイト君が気にすることはないよ……」
「？そういうなら気にしないが」
「リーファちゃん大丈夫？怪我してない？」
「あーもう！私は大丈夫だから！」
「けど僕心配したんだからね⁉？」
「心配かけたことは申し訳ないと思ってるけどさ！」
「……なんかほんわかするな」
「そうですね。けどパパとママも遠くから見るとこんな感じですよ？」
「あ、マジで？」
「はい！私も正直近づくの戸惑います」
「…なんかごめんな？」
「いえ気にしないでください」
「ちょっとカイト君ユイちゃんと話してないでこいつ止めるの手伝って！」
「ええ？なんで俺が……」
「文句を言ってても先には進みませんし行きましょう」
「はぁ面倒ごとばっかだな……あながち茅場さんが言ってたことって間違いじゃなかったな……鬱になりそう……」

to

be continu……

強いが故に周りが見えづらくなるって本当にあるんだね

おいっす～☆挨拶が特に思いつかないカイトさんだよ～☆え？ネタ切れかって？全くもってその通りだよこんちきしょう……！

さて今何をしているかというと……

「リーファちゃんを助けてくれてありがとうございます！」

「あ、うん。別に気にしなくていいよたまたま通りかかっただけだから頭を下げられるほどのことはしてないよ」

「いいえ！サラマンダーの幹部クラスに勝てるプレイヤーなんてそこまで多くないですから誇っていいと思います！」

「？そうなの？正直あいつらメチャメチャ弱かったけどな～」

「……は？流石に冗談ですよね？」

「冗談じゃねぇよ。はっきり言ってあいつらはただ装備に任せて自分の力の半分も出せてねぇ連中だったぞ」

「わかった？レコンこれがカイト君の強さなの。君が思っているよりも何倍も強いんだよ」

「そ、そうなんだ……」

「あ、そうだレコン。私〝パーティー抜ける〟からよろしく」

「え⁉？どういうことリーファちゃん⁉？」

「あー言い方が少し悪かったね〝一時的にパーティー抜けてカイト君の道案内する〟からそれ伝えておいて」

「え⁉？あ、うん…それはわかったけどどうして道案内を？」

「助けてもらったお礼」

「そうなんですか？カイトさん」

「ああ。俺は別にお礼はいいんだけどリーファがどうしてもってな。それに俺自身この世界の地理は全くわからんからなんかそれがちょうどよく当てはまってな……なんかごめんなレコン」

「いえいえ！カイトさんが謝ることじゃないですよ！リーファちゃんがそういうならわかったよちゃんと伝えておくよ」

「ありがとうレコン！それじゃカイト君さっさと行こう！」
「あ⁉？ちょっ⁉？リーファ⁉？……はぁ」
「あ、あはは」
「リーファはいつもあんな感じなのか？」
「そうですね」
「ヤンチャというかなんというか…もう少しお淑やかに出来んのか？」
「あ、あはは……カイトさん」
「んあ？なんだレコン」
「リーファちゃんのことよろしくお願いします！」
「え？いきなりどうした？」
「正直心配なんです…リーファちゃんいつもあんな感じなので……」
「あーつまりかなり前のめりになる節があるからってことか？」
「はい…カイトさんならしっかりと抑えてくれると思ったので……迷惑でしたか？」
「いやそんなことはねぇよ。レコン！リーファのことは任せろ俺が責任持ってちゃんと守ってやるよ。レコンはリーファのこと好きだもんな！」
「ちょっ⁉？カイトさん⁉？なんでわかるんですか⁉？」
「にゃはははは！だってお前わかりやすいからな！…頑張れよ？」
「はい！カイトさんに応援されると勇気が湧いてきます！」
「そうそのいきだ！んじゃ俺もそろそろ行くぞ？」
「はい！呼び止めてしまう形になってすみませんでした！」
「いいってwそんな気にすんなwんじゃまたどこかで会おうぜ！」
「はい！またいつか！」
　レコンはかなり優しい子やな……（しみじみ）ってそんなことよりさっさと行かねぇとあいつに置いていかれる！
「ちょっと待ってくれぇぇぇぇ‼？俺をおいていくなぁぁぁぁ‼？」

to

be continued……

たまに褒めてるのか馬鹿にされてるのかわからないやつってあるよね

おいっす～☆最近みんなから忘れられてるカイトさんだよ～☆……言ってて悲しいなこれ……さてそんなことは置いといて、今なにをしているかというと……

「それにしてもホントにカイト君の成長速度って異常だよね…」

「それは馬鹿にしてんのか？それとも褒めとるのか？前者だった場合流石に怒るぞ？」

「褒めてます～！だってこの短時間でここまで飛行がスムーズにできる人ってあたし見たことないんだよね～」

「まあパパですからあまり深く考えない方がいいですよ」

「それもそうだね」

「なんで〝俺〟だからっていう理由でそんな結論に至るの？悲しくなってくるよ？」

「ゴメンって。さ、早く行こ？あんまり時間ないんでしょ？山も越えないといけないからかなり頑張らなきゃ」

「そうなのか…山っつうのは目の前にあるあの山のことか？」

「そうそう」

「飛んで越えらんねぇのか？」

「残念だけど基本的には山や洞窟なんかは飛んで移動はできなくなってるんだよ」

「…なるほどな…しっかりとゲームバランスは保ててはいるんだな」

「山は歩いての移動になるからかなり時間かかるからそこは頭に入れておいて欲しいかな」

「了解。……ん？」

「どうかしたの？」

「…いや誰かに見られてる気がしてな……」

「気のせいじゃない？誰かがいるわけでもないし私たちをつけてくる物好きな人でもない限り尾行するなんてしないでしょ」

「…確かにそうかも知れんがな…不吉なことが起きなけりゃいいけどな……ユイ周りになんかの反応は？」
「はい。特に異変はないですがさっきから虫みたいなものがついてきています」
「⁉？まさか追跡魔法⁉？カイト君今すぐに消さないと！」
「なんでか知らんが了解！」スパッ！
「これでいいか？」
「うん、ありがとう。あのまま気づいてなかったら私たちがログアウトしたときにやられるとこだったよ」
「へぇ～そんなＰＫ方法もあるんかこの世界は」
「うん、だから早めに気づけてよかったよ」
「……そういやもうこんな時間か…」
「ほんとだ！私もうそろそろでご飯の時間なんだよね」
「なら山に入る前に一旦ログアウトして色々済ましてからきた方が良さそうだな」
「そうだね。どっちからログアウトする？」
「ん？一斉にログアウトしちゃダメなんか？」
「それだとＰＫに会う可能性があるから１人が監視してないと危ないよ。それにさっきのこともあるしさ」
「……言われてみればそうだな。なら俺は後ででいいよ。俺ん家は飯の時間少し遅いからな」
「なら先にいかせてもらうね！護衛よろしく！」
「へいへい」
「ほーこれでログアウトが完了するんか」
　さて護衛とは言われたものの特にやることもないし戻ってくるまで何をしてようか…
「パパ」
「ん？どうした？ユイ」
「大丈夫ですか？」
「何がだ？俺は元気だが？」
「最初に再開した時からずっと思ってたんですが…少し張り詰めすぎ

じゃないですか？」
「⁉？……確かにこの世界にきてからずっとアスナのことしか考えてないな…」
「ママのことを心配する気持ち、助けたい気持ちはわかりますが今のままいけばその前にパパが壊れてしまいます」
「…そうかも知れんがどうしても助けたいって気持ちが前のめりになるんだ…頭ではわかっちゃいるんだがな」
「せめて今だけはリラックスしてください。休息も必要ですから」
「……ありがとなユイ心配してくれて」
「いいんですよ。わたしには〝これくらい〟しかできませんが…」
「〝これくらい〟じゃないさ。ユイの言葉で俺が救われたんだあんまり自分を卑下しないでくれ」
「ごめんないそしてありがとうございますパパ！」
「ユイが元気であればそれでいいよ」
　ありがとなユイお陰で気が楽になった…確かに俺は張り詰めすぎてたな…これからは肩の力を抜いて少しリラックスした状態でやるか……ユイには助けられてばっかだな…ユイのためにも早くアスナを助け出さないとな……

to be continu……